

第1章 浜松市の歴史的風致形成の背景

1-1.位置と市域

(1)位置

本市は、静岡県西部に位置し、首都圏と関西圏の2つの経済圏のほぼ中間の距離にある。東は磐田市、周智郡森町、島田市、榛原郡川根本町、西は湖西市、愛知県豊橋市、新城市、北設楽郡東栄町、同豊根村、北は長野県飯田市、下伊那郡天龍村と接している。

県庁所在地となる静岡市中心部へは、およそ70キロメートルの距離があるが、山間部では川根本町を挟んで両市の市境は比較的近い。



図1-1-1 静岡県の位置

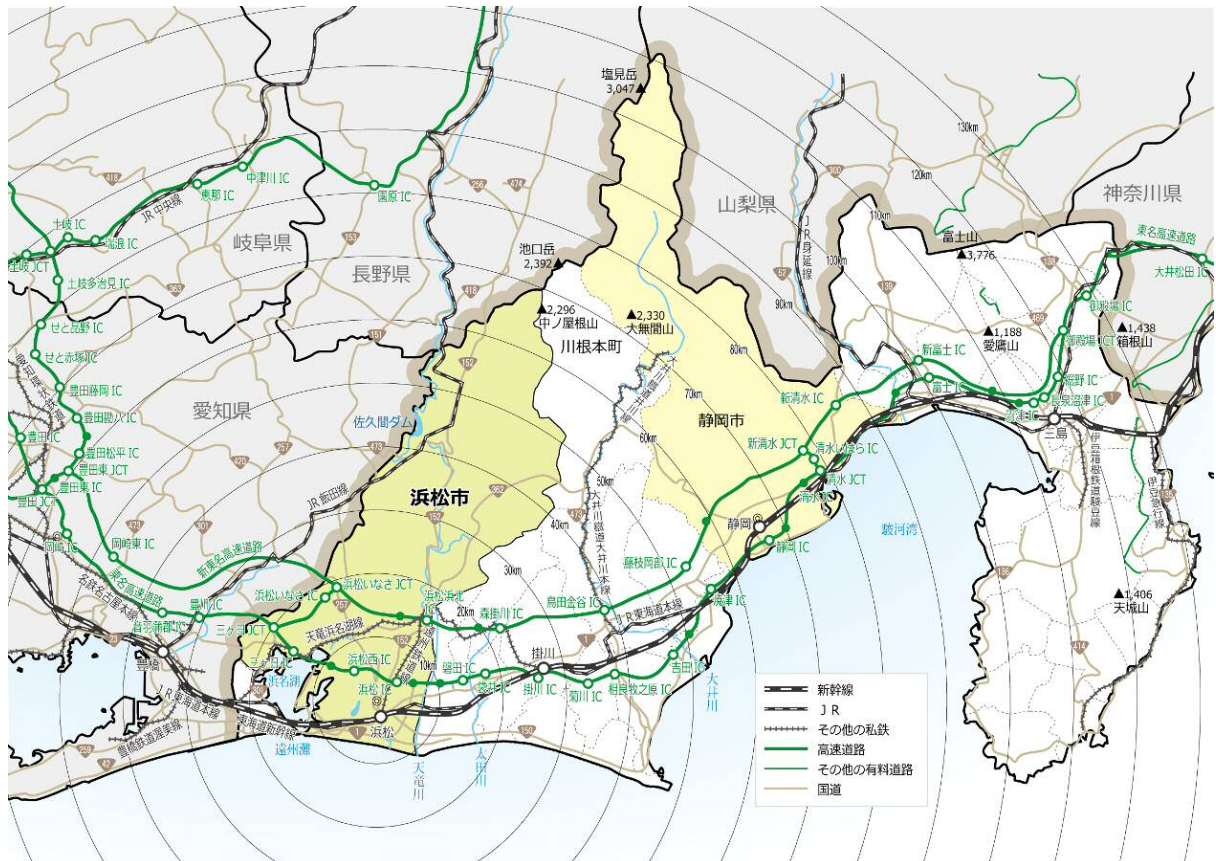


図1-1-2 浜松市の位置(同心円のそれぞれの幅は10キロメートル)

(2)市域の変遷

明治4年(1871)、^{はいはんちけん}廃藩置県により浜松県が置かれた。明治9年(1876)に静岡県と合併し支所が置かれ、明治22年(1889)の町村制施行により浜松町となった。その後、20年間に2か村の一部を合併し、明治44年(1911)7月1日に市制が施行され、県下では静岡市に次いで2番目の市が誕生した。

昭和28年(1953)に施行された町村合併促進法に基づいて、昭和29年(1954)に行った合併のあとも、昭和30年(1955)から昭和40年(1965)にかけて合併を繰り返してきた。平成3年(1991)には^{かみ}可美村を合併し、平成17年(2005)に、浜松市、^{はまきた}浜北市、^{てんりゆう}天竜市、^{まいさか}舞阪町、^{ゆうとう}雄踏町、^{ほそえ}細江町、^{いなさ}引佐町、^{みつかび}三ヶ日町¹、^{はるの}春野町、^{さくま}佐久間町、^{みさくぼ}水窪町及び^{たつやま}龍山村の12市町村が合併して、現在の面積1,558.06平方キロメートル、人口80万人を超える新しい「浜松市」が誕生した。

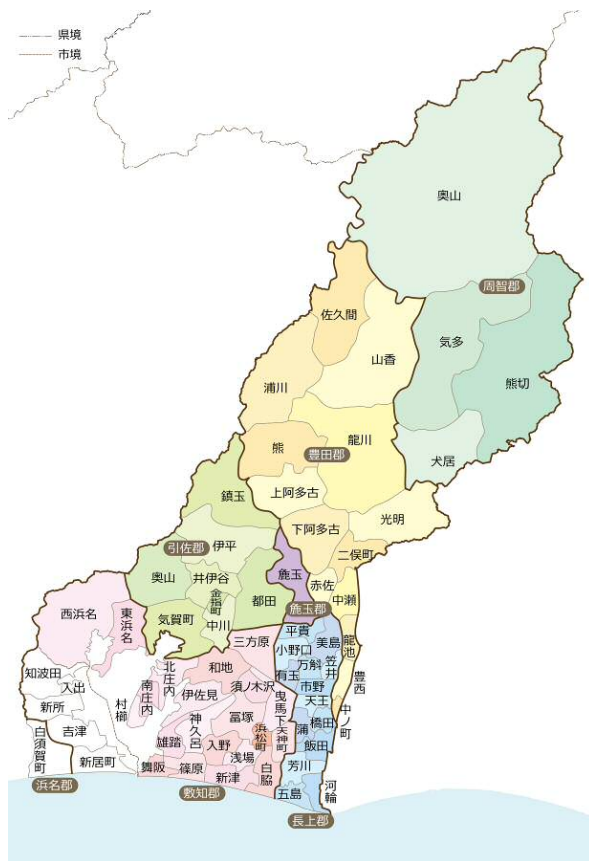


図1-1-3 浜松市の変遷(1) 明治22年(1889)時点
(図には現湖西市域を含む：以下同じ)

およそ130年前の浜松市域は、北東から周智郡、豊田郡、亀玉郡、長上郡、引佐郡、敷知郡に分かれていた。町制がしかれていたのは浜松町と二俣町ほかで、ほとんどは村であった。なお、現在の三ヶ日町にあたる東浜名村、西浜名村は、現湖西市側の村々とともに古代の浜名郡域にあたるが、この時点では敷知郡に所属している。

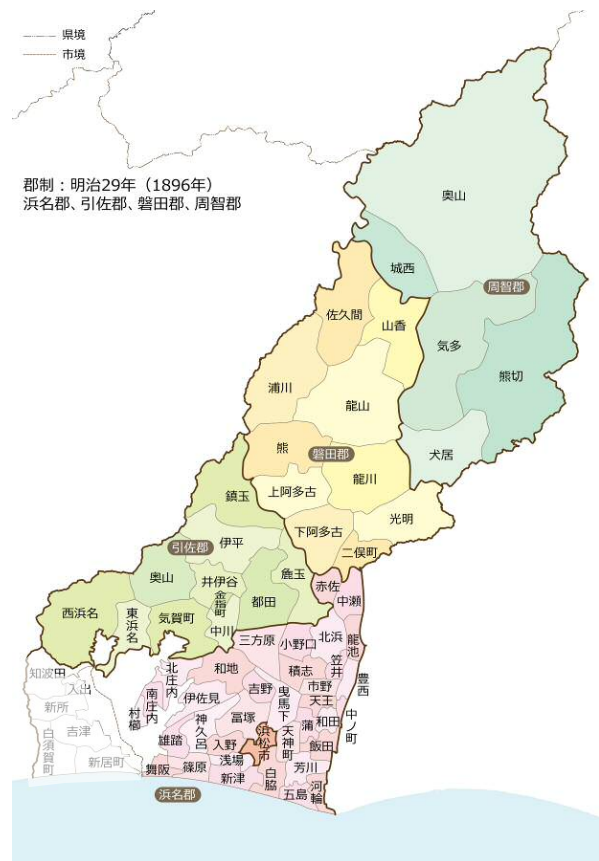


図1-1-4 浜松市の変遷(2) 明治44年(1911)時点

浜松市(図下部の赤色)が市制を施行したころ。

¹ 三ヶ日町(みつかびちょう) 旧三ヶ日町(引佐郡、昭和30年から平成19年までの自治体名)は大きな「ヶ」を使用して表記していた。合併以後(浜松市浜名区)は小さな「ヶ」で表記している。本計画書では小さい「ヶ」で統一している。

1-2. 自然的環境

(1) 地勢

本市は、南北約 73 キロメートル、東西約 52 キロメートルの南北に長い市域を持ち、面積は 1,558.06 平方キロメートルに及び、岐阜県高山市に次ぐ全国で 2 番目の広さを有する。

北には赤石山脈、東は天竜川、南は遠州灘、西は浜名湖が位置し、険しい山々、なだらかな台地、平野、河川・湖など、変化に富んだ地形を有している。

そのなかでも、天竜川中流域は急峻な山間地、下流域は扇状地が広がる平野部となっており、市域南部に位置する三方原台地は、更新世(洪積世、約 100 万年～1 万年前)に天竜川の砂れきが運ばれてできた扇状地が隆起した台地で、扇央に近い北東部で標高 100 メートルから南に向かって低くなり、南端部では 20 メートルの高さを持つ海食崖となっている。台地の表面は、酸性の強い地味のやせた赤土で覆われ、多少の起伏はみられるが、大部分は平坦である。周辺部には大小の浸食谷が入り組んでいる。台地上には大きな河川はなく、地下水も 15～20 メートルの深い井戸を掘らなければ得ることができない。

市域北部に連なる赤石山脈では、天竜区水窪町に位置する中ノ尾根山が標高 2,296 メートルの市内最高地点となり、付近の山間部に点在する平地でも標高 300～800 メートルとなっている。なお、市域南西部から湖西市にかけての県境に連なる緩やかな山々を静岡県側からは「湖西連峰」と呼び、愛知県側からは「弓張山地」と呼ぶ。

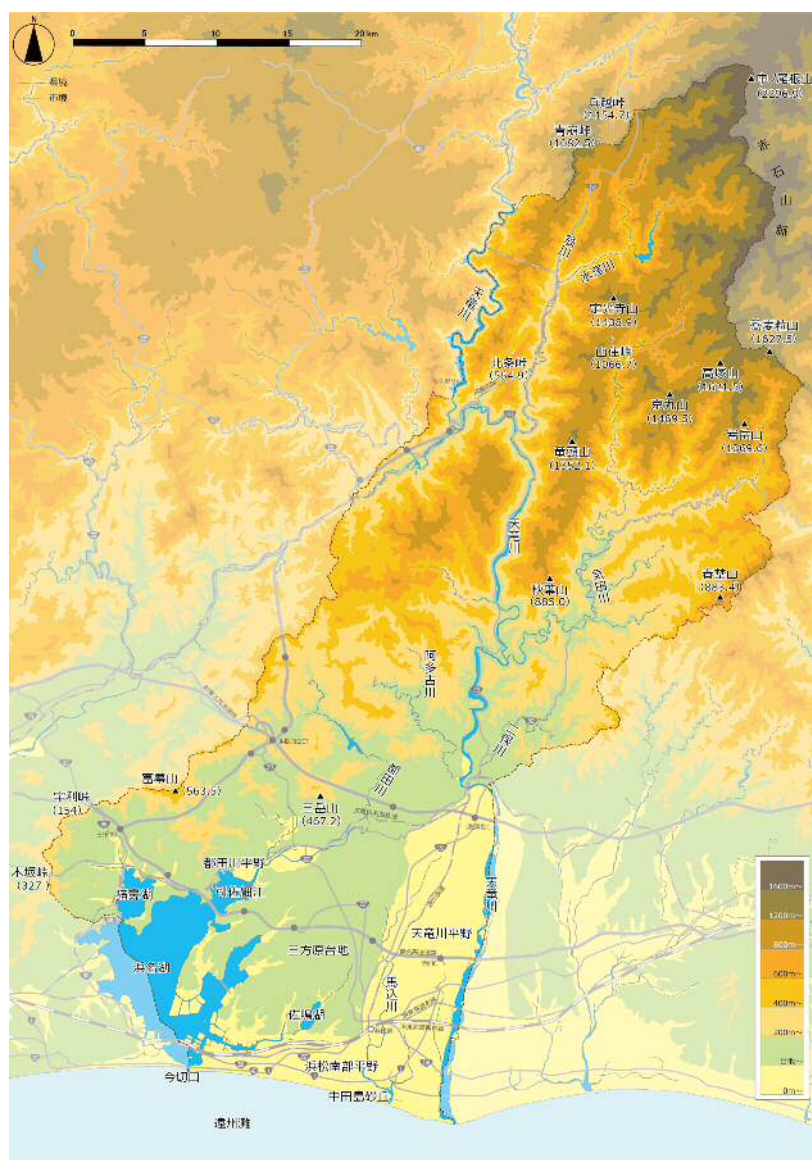


図1-2-1 浜松市の地勢

(2)地質

本市の地質は、西南日本を内帯(日本海側)と外帯(太平洋側)に二分する総延長 800 キロメートルに及ぶ日本最大の断層帯である中央構造線¹により特色が分けられ、急峻で複雑に侵食された山間部でも、この断層に沿って直線的に形成された谷地形を見ることができる。

長野県飯田市から青崩峠^{あおくずれとうげ}を経て浜松市域に連なる中央構造線は、国道 152 号(秋葉街道)の谷に沿って水窪の市街地付近を經由し、北条峠^{ほうじとうげ}を通過して県道 290 号の谷から佐久間、中部へと続き、このあたりから J R 飯田線と並行して浦川を經由して愛知県鳳来町から豊川沿いに豊橋から渥美半島北岸の沖合の三河湾へと続いている。

本市の一部地域が属する西南日本内帯では、花崗岩類や片麻岩類が発達している。一方、本市の大部分の地域が属する西南日本外帯では、各種の岩層が平行し、帯状構造が発達している。中央構造線に接して内側から三波川結晶片岩・御荷銚緑色岩類・秩父古生層及び中生代地層の変成していない堆積岩類の順に並ぶのが原則である。天竜区水窪町から浜名区根堅付近を経て、浜名区滝沢町、引佐町、三ヶ日町へと石灰岩の露頭が連続して点在するのも特色のひとつである。日本列島を縦断する中央構造線だが、この地方では、中央構造線がフォッサマグナ²の影響により、これまで東西方向であったものが南北方向に転向することにもない、天竜川の東に南北性の赤石裂線^{あかいしれつせん}が出現し、また外帯山地が中央構造線とフォッサマグナに挟まれて北へ行くほど楔形^{くさびがた}に狭くなり、赤石楔状地^{あかいしせつじょうち}が形成されている。



図1-2-2 日本列島付近のプレート境界
静岡県は、フィリピン海プレートとユーラシアプレートがぶつかり合う先端にあたる。また、日本最大の断層である中央構造線とフォッサマグナ(大地溝帯)が交錯している。

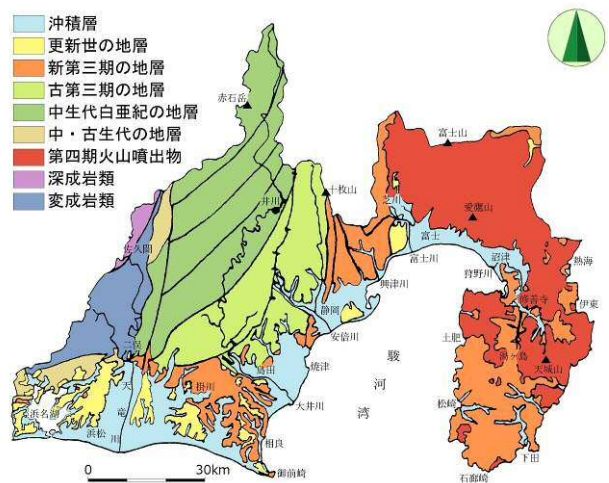


図1-2-3 静岡県の地層と断層
『静岡県の自然をたずねて』(2005年)所収図を引用、加筆着色。

¹ 7000 万年ほど前に、すでにアジア大陸の東端にできていた日本列島の日本海側側半分に、南からやってきた太平洋側の半分がくっついて日本列島が完成した。その接合面を中央構造線という。

² フォッサマグナとは、1450 万年ほど前に日本海ができた際、日本列島が大陸から離れ、糸魚川・静岡構造線の東側が陥没したところ。

(3)河川

長野県の諏訪湖を水源に持つ天竜川(一級河川)は、市域北部から南部へ貫流する。

長野県内の上流域は比較的ゆるやかに流れ、伊那盆地を形成し、長野県と静岡県^{おきながわ}の県境付近を流れる中流域からは険しい溪谷が形成されている。市域北部もこの範囲で、溪谷は翁川や阿多古川^{あたごがわ}という支流を合わせ、二俣川^{ふたまたがわ}の旧合流点(二俣という地名)を終点とする。二俣から南の扇状地、次いで海岸平野となる部分を下流域とする。天竜川は、下流域の距離がもっとも短い。下流部の流路は磐田市との市境を成して遠州灘^{えんしゅうなだ}に注いでいる。こうした天竜川本流には、現在、発電を目的としたダムが3基(佐久間ダム、秋葉ダム、船明ダム^{ふねあき})建設されている。

なお馬込川^{まごめがわ}は現在の水系としては天竜川と別にされているが、江戸時代以前は天竜川の一
流路であった。扇状地を縦横に流れた流路のうちの名残といえる。むしろ時代をさかのぼれば、馬込川^{まごめがわ}が天竜川の本流だった時代がある。東海道沿いの引間^{ひくま}や、姫街道(古代の浜名湖北回り東海道)沿いの有玉幡屋^{ありたまはたや}は中世の街道が天竜川の渡船となる場所に発達した宿場で、古文書や地名から市場が存在したことも確実である。二俣はこれらの都市と天竜川の水運で直接結ばれていた。さらに河口近くの内水面にあった湊(おそらく白羽^{しろわ}とか田尻^{たじり}などの地名にあたる場所、掛塚^{かけつか}もその一つ。)から、船を乗り換えて川上にも物資が運ばれていた。

市域南部には、中心市街地の大部分を流域に含み、馬込川(二級河川)を幹川に持つ馬込川水系と、鷲ノ巣山^{とびのすやま}を頂点として浜名湖の周りを流域とし、都田川(二級河川)を幹川に持つ都田川水系がある。浜名湖は都田川水系に含まれる。

馬込川水系の流域は、三方原台地東縁にあたり、かつて天竜川が乱流していた地域である。湧水に恵まれた台地縁辺の崖線^{がいせん}付近には、集落跡、貝塚などの遺跡があり、古代より人々の暮らしが営まれていた。流域北半には縄文時代の遺跡や古墳などが見られ、南半は弥生時代以降、中近世にかけての集落跡や城館などが見られる。なお、馬込川を江戸時代以前には天竜川流路の一部であると見なせば、浜松市域は天竜川水系と都田川水系の2水系に大別される。現在の浜松市中心市街地(江戸時代の浜松城下町、戦国時代以前の引間宿^{ひくま}をその前身とする)は、この2つの水系の接点に設けられている。



図1-2-4 流域図

1 船明ダムは、発電のほか、かんがい用水・上水道用水・工業用水の目的で建設された。

(4)気候

①概況

本市の過去5年間(平成25年(2013)～平成29年(2017))の月別平均気温と月別平均降水量は、図1-2-5のとおりである。

月別平均気温をみると、最高が8月の27.8℃、最低が1月の6.3℃である。年間平均気温は16.9℃である。一方、月別平均降水量は、9月と10月がもっと多く300ミリを超えている。また、次いで4月が多く、228.5ミリである。

ただし、本市は南北に長い市域を有するとともに、^{なかのおねやま}中ノ尾根山(標高2,296メートル)を市内最高地点として土地の高低差が大きいことから、同じ市内においても天気や気温などに差が見られる。市域南部は晴天が多く、冬でもほとんど雪は降らない。一方、市域北部は長野県南部に近く、標高が高い地域では雪が多く降る。市域南部は東海気候区に属し、市域北部のほとんどを占める標高の高い部分は中央日本山岳気候区に属する。東海気候区は、本州ではもっとも温暖な地域にあたり、前述したように冬季に雪がほとんど降らず、「冬が厳しくない」ことが特色だが、俗に「^{えんしゅう}遠州のからっ風」と言うように、冬の晴天には強い北西風が吹くことが多く、体感温度は高くない。西側に風を遮る高い山を持たない市域南部に、本州の狭窄部にあたる若狭湾から琵琶湖を經由し濃尾平野まで雪を降らせ、浜松付近では乾燥した強い風が吹き抜ける冬の卓越風である。

なお、詳細な年平均気温分布をみると、市域南部は15.1～17.5℃であるが、市域北部の山間部では5.1～7.5℃となり、その差は約10℃となる。年間降水量分布では、市域南部は1,800ミリ程度であるが、市域北部の山間部では2,500ミリを超えている。年間日照時間分布では、市域南部は2,100時間を超えるが、市域北部の山間部では1,901～2,000時間程度と減少する。

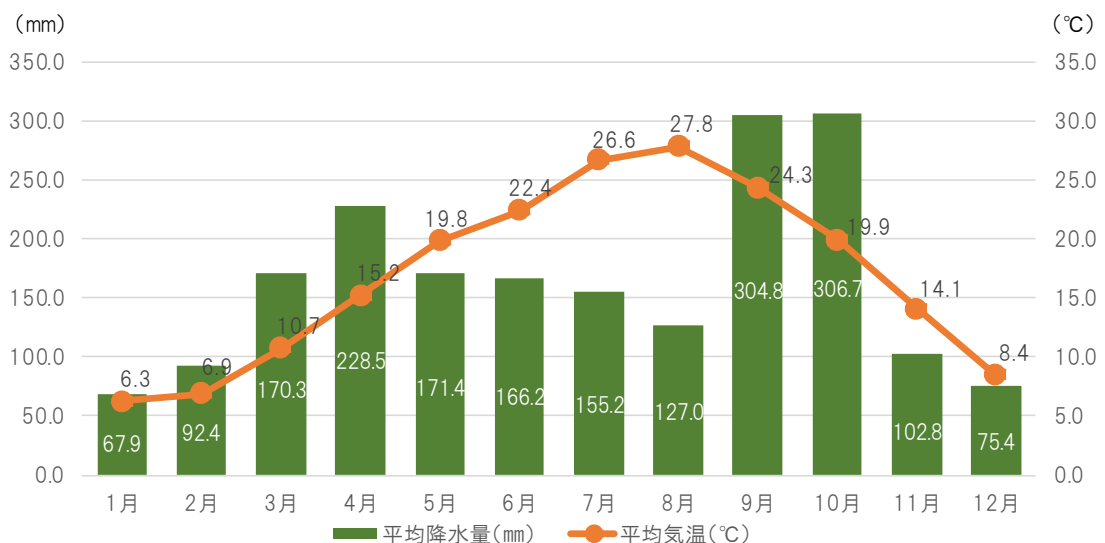


図1-2-5 過去5年間(平成25年(2013)～平成29年(2017))の月別平均気温と月別平均降水量

②浜松市の気温分布

市域が南北に長く、南アルプスから太平洋岸まで高低差がある浜松市では、北部の山地と南部の海岸平野とで年平均気温も大きく異なっている。南部の市街地を中心とした太平洋沿岸の平野部に対し、浜名湖北岸の丘陵部から天竜(二俣付近や春野町南部の中山間地)にかけては平均数度低く、さらに市北部の市内最高峰となる中ノ尾根山^{なかのおねやま}を中心とする山地では平野部と比べて約10℃低くなっている。

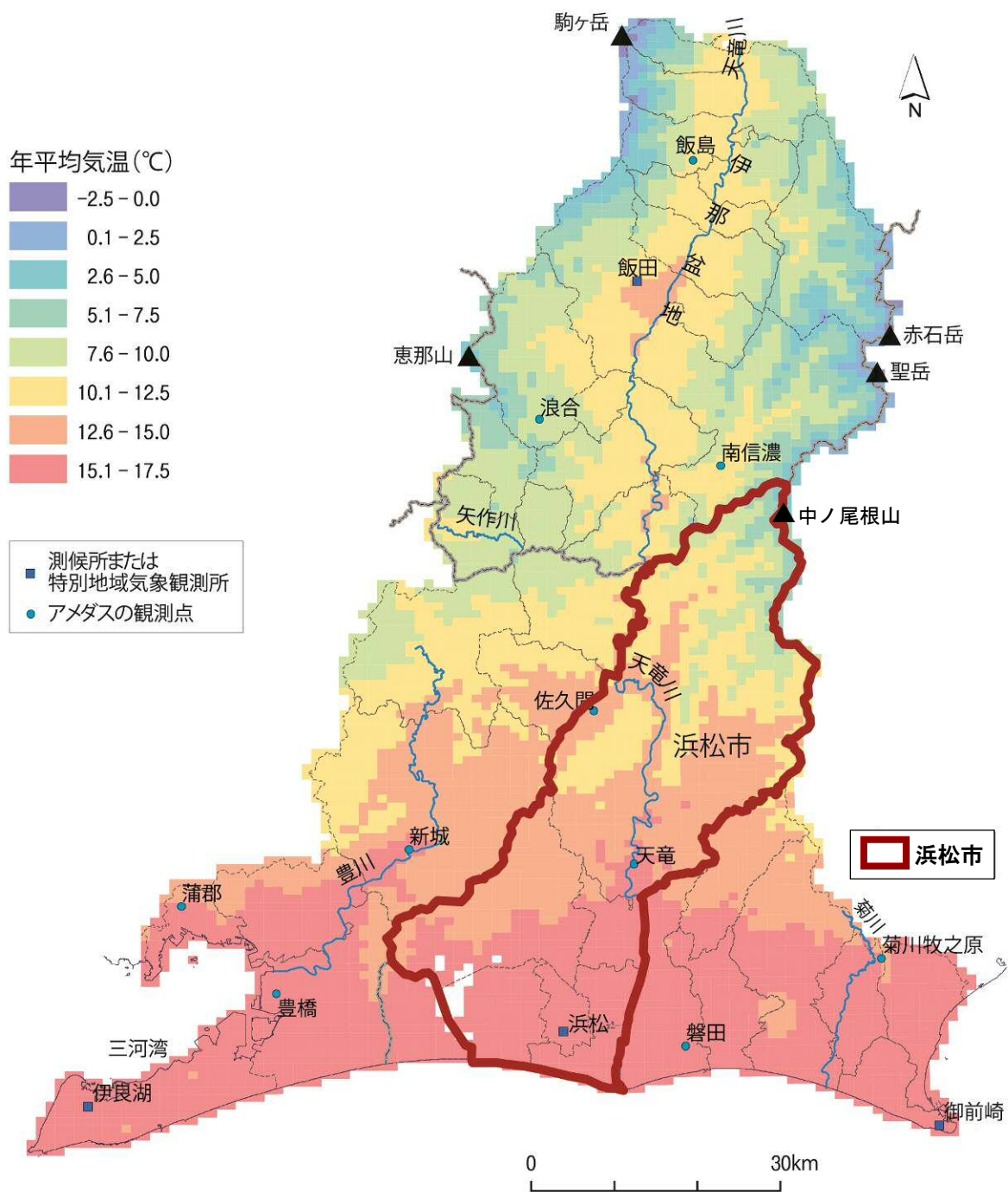


図1-2-6 地域別の年平均気温 (愛知大学三遠南信地域連携研究センター『図説 三遠南信のすがた』を引用)
※気象台の位置は、現況と異なる。

③浜松市の年間降水量

本市は比較的降水量の多い地域ではあるが、その傾向は市域北部の山地で顕著である。年間 2,000 ミリを超えるのは天竜(二俣付近)以北で、春野町内では 2,500 ミリを超える場所もある。市域南部の平野部でも年間 1,800 ミリ程度の降水がある。ただし、浜名湖沿岸では比較的降水量が少なく、全国的に見ても平均的な降水量である。

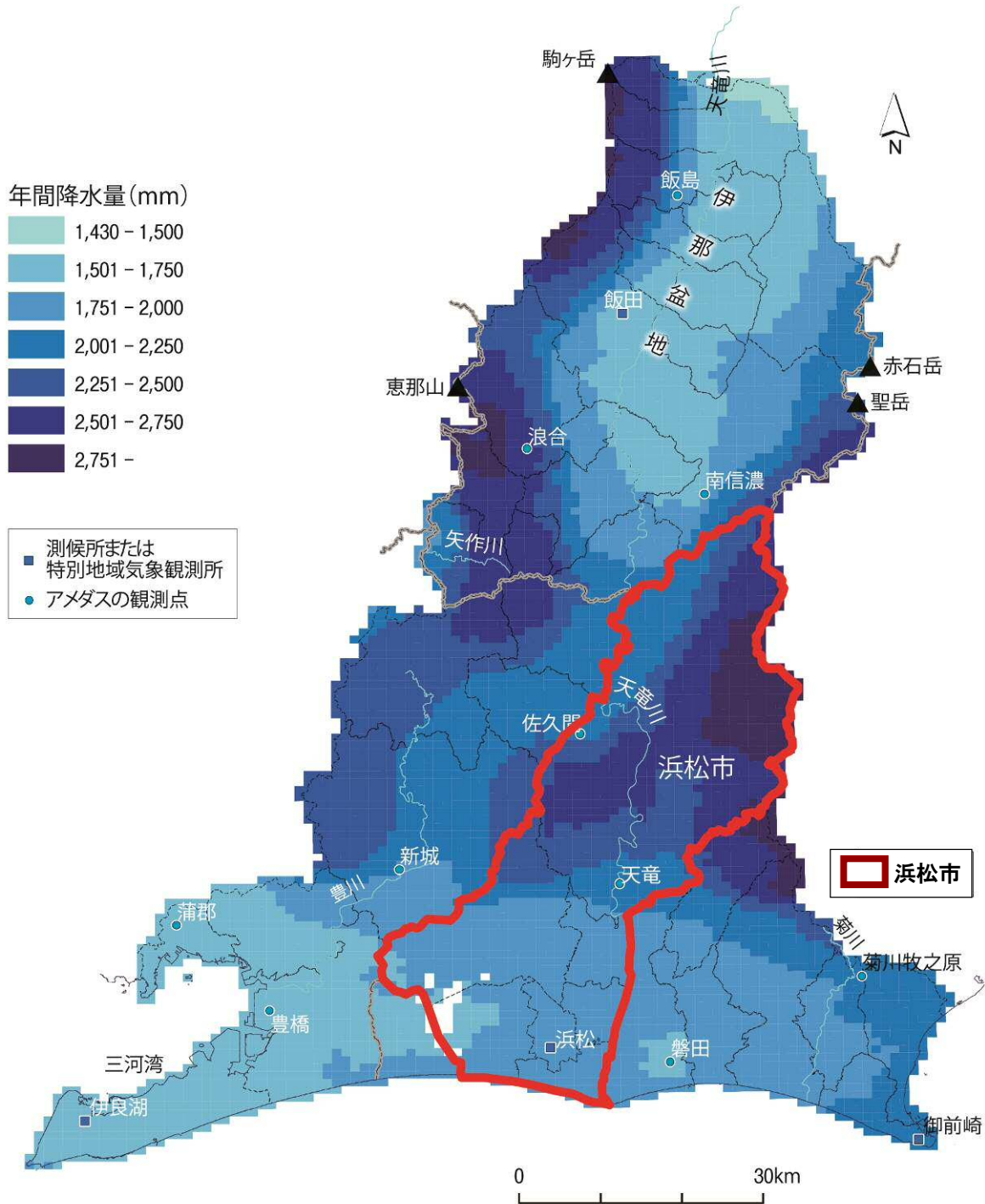


図1-2-7 地域別の年間降水量 (愛知大学三遠南信地域連携研究センター『図説 三遠南信のすがた』を引用)

④ 浜松市の年間日照時間

市域南部は、全国的に見ても年間日照時間が長い地域で、早くからさまざまな農作物の耕作や温室栽培の導入、また木材の乾燥・加工などに生かされてきた。近年では、太陽光発電による再生エネルギーの積極的な導入に結びついている。市域北部の山間部と天竜(二俣付近)は比較的日照時間が短い。

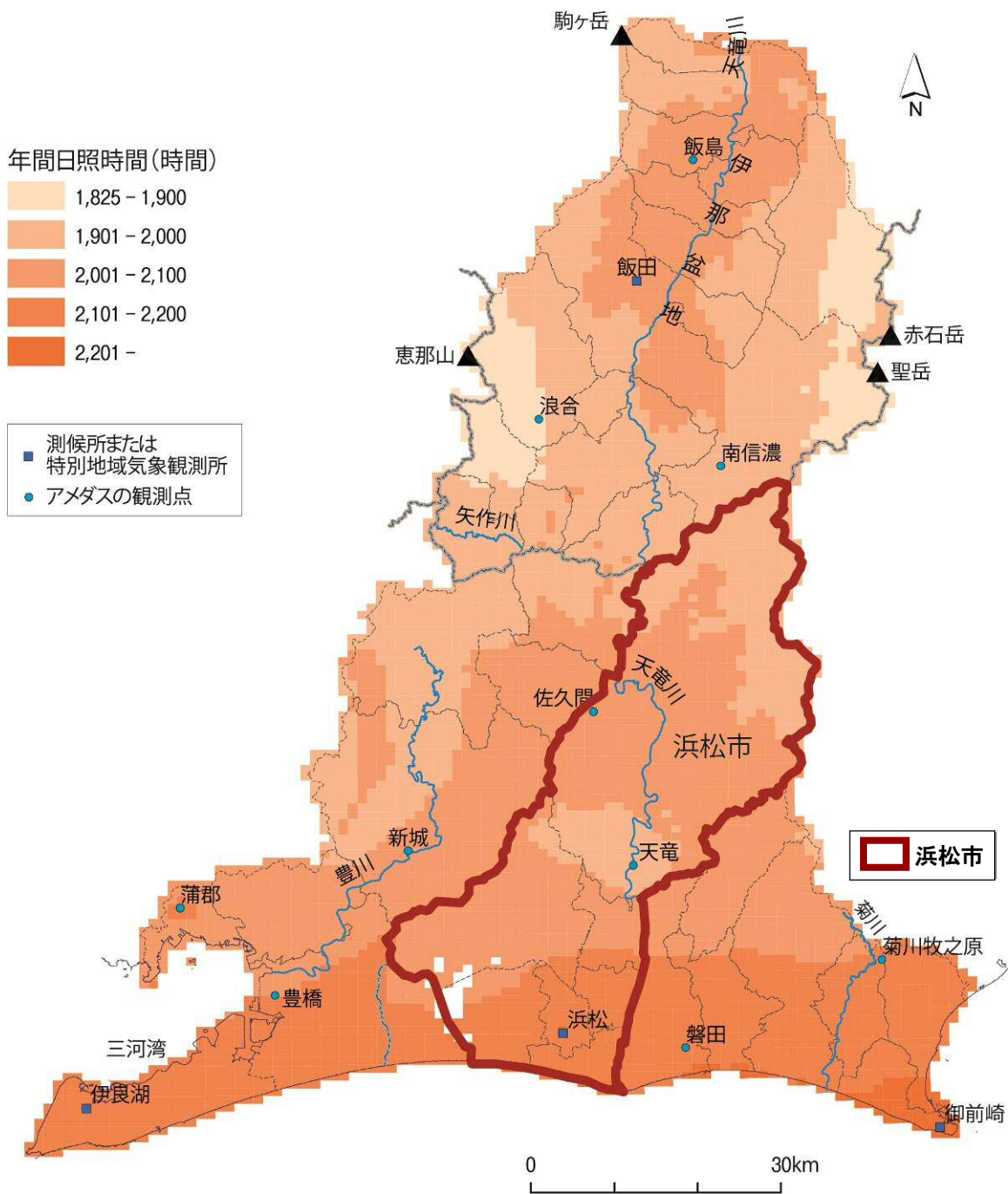


図1-2-8 地域別の年間日照時間 (愛知大学三遠南信地域連携研究センター『図説 三遠南信のすがた』を引用)

1-3.社会的環境

(1)人口

①人口の推移と将来推計人口

本市の人口は、令和3年(2021)10月1日現在796,829人(住民基本台帳)であり、静岡県内において最大の規模である。平成27年(2015)以降の全人口は微減している。全人口に占める15歳未満人口の割合が減少し続ける一方、65歳以上人口の割合は増加しており、少子高齢化がうかがわれる。将来推計人口をみると、平成27年(2015)以降減少し続け、約30年後の令和27年(2045)で約704,000人となることが予想されている。

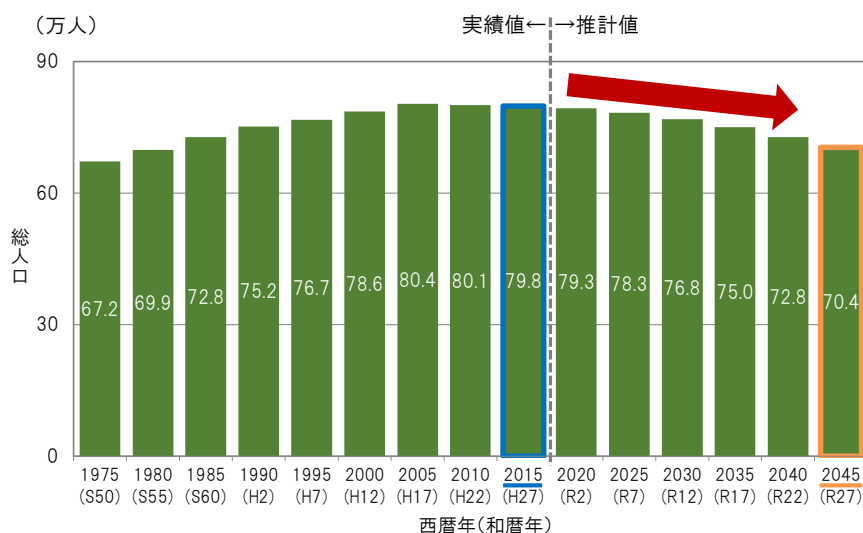


図1-3-1 資料 総人口の推移
(H27までは国勢調査、R2以降は国立社会保障・人口問題研究所資料を基に作成)

②年齢別人口

令和3年(2021)10月1日現在の年齢3階層人口をみると、0～14歳は101,313人(12.71%)、15～64歳は471,500人(59.17%)、65歳以上は224,016人(28.11%)となっている。

65歳以上の割合をみると、静岡県全体の割合30.1%(令和2年(2020)国勢調査より)と比較すると2ポイント下回っているものの、21.0%を超えた超高齢社会となっている。

将来推計をみると、0～14歳と15～64歳の人口は減少し、65歳以上の人口は増加して、さらなる高齢化の進行が示されている。

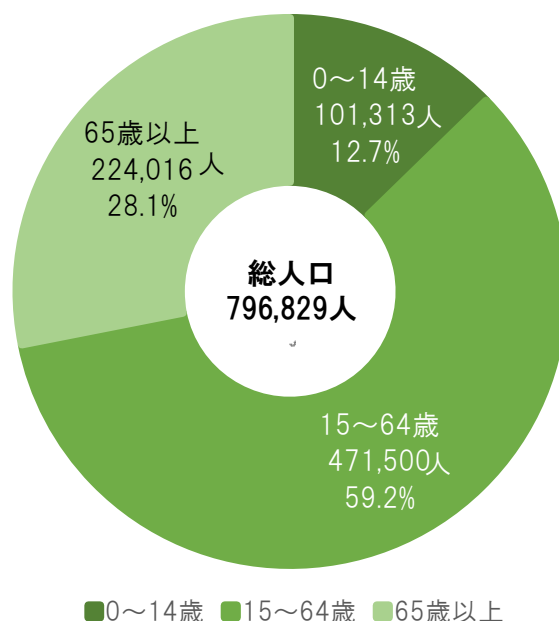


図1-3-2 年齢別人口(令和3年(2021)10月1日時点)

(2)土地利用

本市は、森林が市域の68.0%、農用地が8.9%、宅地が7.8%を占めている(平成19年(2007))。

また、市域(1,558.06平方キロメートル)の約33%にあたる514.55平方キロメートルが都市計画区域に指定され、このうち、市街化区域が98.901平方キロメートル、市街化調整区域が415.649平方キロメートルである。

一方、都市計画区域外は1,043.51平方キロメートルで、日本三大人工美林の天竜美林をはじめとする豊富な森林資源を有するとともに、各地に集落が点在している(静岡県統計年鑑2016(平成28年)より)。

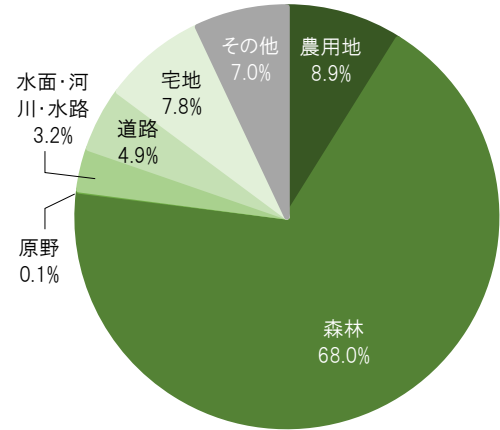


図1-3-3 地目別土地利用面積(平成19年(2007))

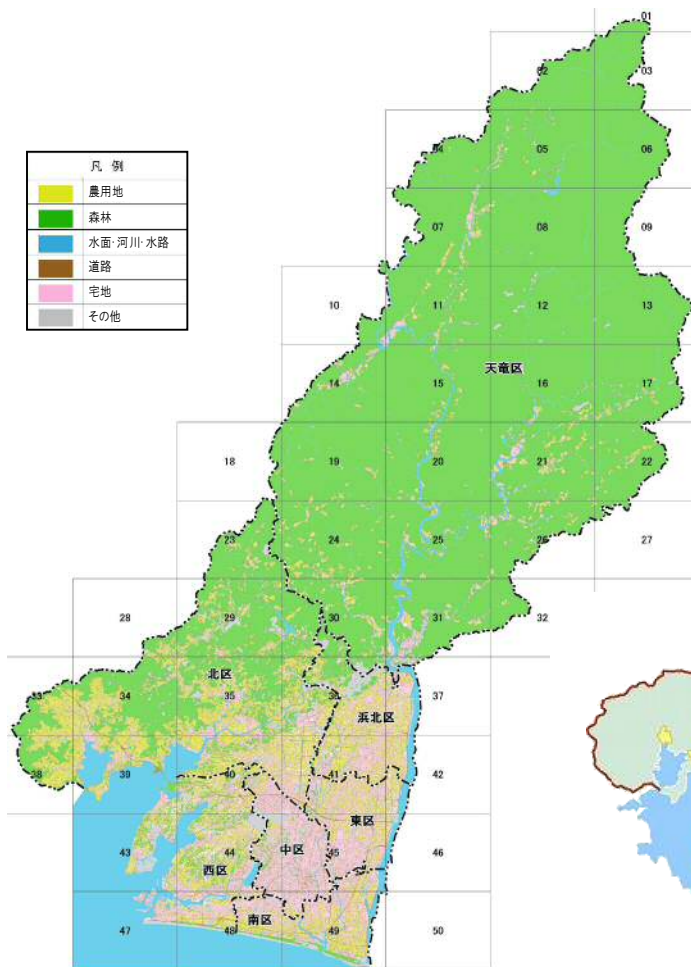


図1-3-4 地目別土地利用(平成19年(2007))

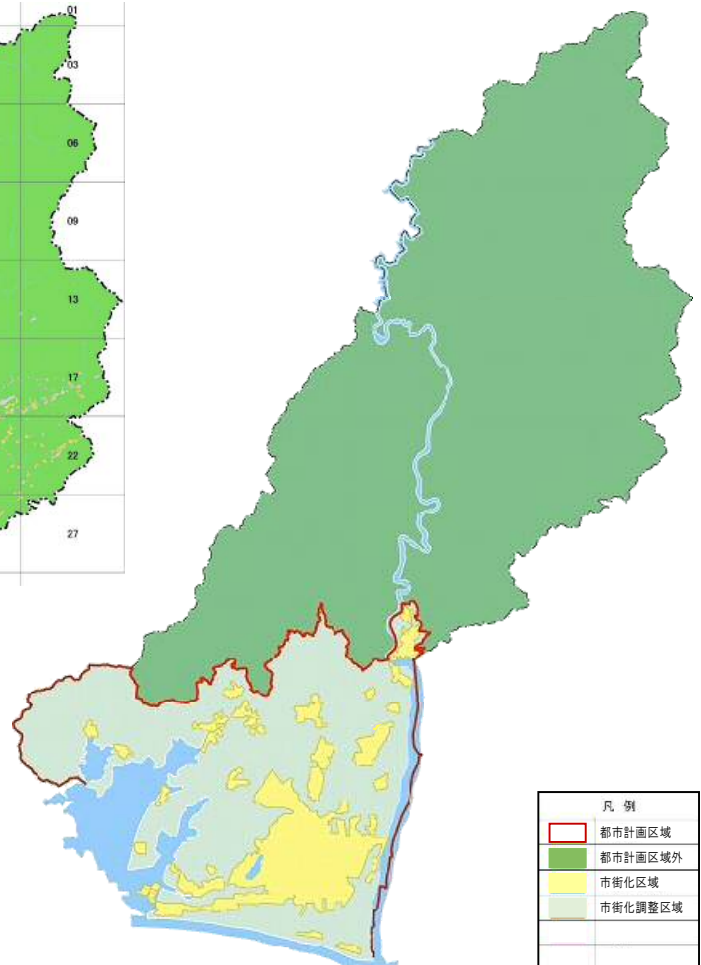


図1-3-5 都市計画区域など(令和3年(2021))

(3)交通

鉄道は、J R 東海道新幹線と J R 東海道本線が市域南部において東西方向に通っている。また、天竜浜名湖線が市域南西部から東部を結んで通り、遠州鉄道鉄道線(西鹿島線)が南北方向に通っている。さらに J R 飯田線が市域北西部において南北方向に通っている。なお、市内に東海道新幹線は浜松駅の 1 駅を有し、東海道本線は 5 駅、飯田線は 13 駅を有している。

東海道本線は、東京と京阪神を結ぶ輸送路として、明治政府によって全国的にも優先的に建設が進められた。当初は中山道を経由する路線が計画されたが、山岳が多く、技術的経済的な理由で東海道経由に変更された。浜松駅以西は明治 21 年(1888)年 9 月までに、浜松駅以東は天竜川橋梁の完成とともに明治 22(1889)年 4 月に開通し、同年 7 月に全線が開通した。

飯田線はもともと、愛知県内で豊橋駅から三河川合駅までと、長野県内で辰野駅から天竜峡駅まで開通していた別々の鉄道だったが、両線の間を山間部をつなぐ三信鉄道が計画され、昭和 7 年(1932)に着工、難工事による中断を経て昭和 11 年(1936)に全線が開通し、豊川流域と天竜川上流域が結ばれた。これにより市域北部(天竜区佐久間町)に鉄道が經由することになった。その後、佐久間ダム建設によって、佐久間駅から大嵐駅間が水没するため、昭和 28 年~30 年(1953~1955)にトンネルによって水窪川沿いに大きく迂回する路線が建設された。佐久間町城西地区や水窪町(いずれも天竜区)に鉄道が乗り入れた。

天竜浜名湖線は、戦前に東海道本線のう回路として建設された国鉄二俣線が前身である。市内では天竜二俣駅に車両基地が残されており、気賀から西では浜名湖畔に沿って進む。

道路は、東京都中央区を起点として大阪市へ至る国道 1 号が市南部を横断するとともに、静岡市清水区を起点として浜松市へ至る国道 150 号、浜松市を起点として和歌山県和歌山市へ至る国道 42 号、浜松市を起点として愛知県豊田市へ至る国道 301 号、愛知県豊川市を起点として静岡市へ至る国道 362 号、及び愛知県蒲郡市を起点として牧之原市へ至る国道 473 号(国道 152 号、国道 362 号と重複)が横断している。南北には、長野県上田市を起点として浜松市へ至る国道 152 号と浜松市を起点として岐阜県高山市へ至る国道 257 号が縦断している。

広域交通網では、浜松インターチェンジを始めとする 3 つのインターチェンジを有する東名高速道路が市域南部を東西に横断し、その北側を 2 つのインターチェンジを有する新東名高速道路が並行して東西に通っている。東名高速道路には三方原と舘山寺に ETC 搭載車を対象としたスマートインターチェンジがあり、新東名高速道路にも浜松サービスエリアに併設されたスマートインターチェンジがある。これらにより、中心市街地をはじめ市内の主要な観光地への接続が改善されている。なお、東名高速道路と新東名高速道路は、三ヶ日ジャンクションと浜松いなさジャンクション間に連絡路がある。浜松いなさジャンクションからは三遠南信自動車道が愛知県の鳳来峡付近を経由して長野県の飯田市に接続する予定である。現在は一部区間が供用されているが、浜名区引佐町寺野、天竜区佐久間町川合、浦川など、開通した区間では、市内外との交通利便性が向上している。



図1-3-6 鉄道・道路網

(4)産業

平成27年(2015)の国勢調査によれば、15歳以上の就業者総数390,944人のうち、第1次産業就業者は15,563人(4.0%)、第2次産業就業者は134,582人(34.4%)、第3次産業就業者は240,799人(61.6%)である。

第3次産業では就業者数と全体に占める割合のいずれもが増加傾向であるが、第1次産業と第2次産業はいずれもが減少傾向を示している。

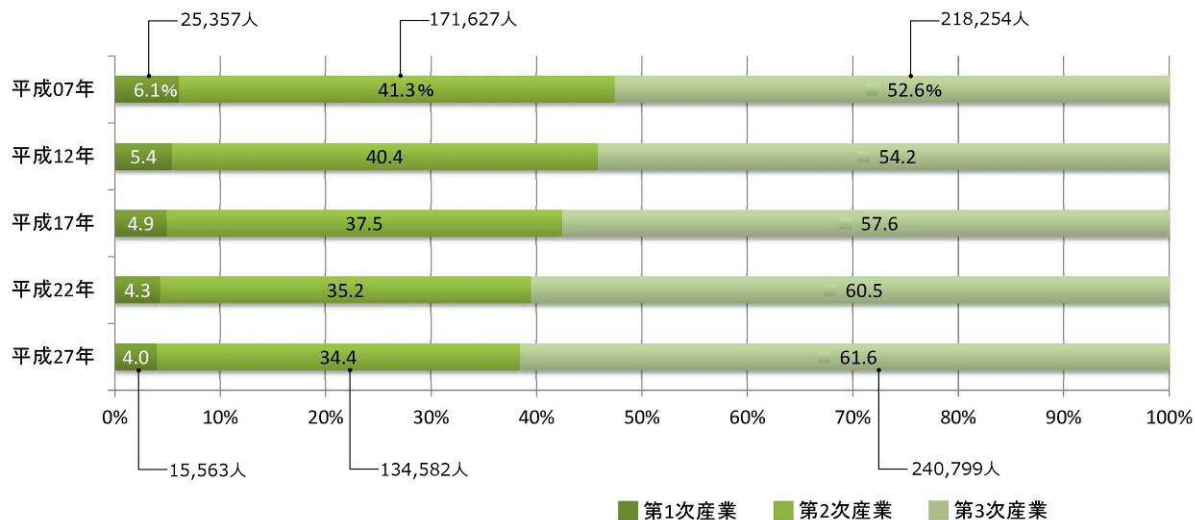


図1-3-7 産業(大分類)別就業者数(15歳以上)〔「分類不能な産業」の就業者数は除く〕

①農林水産業

ア.農林業

天竜川中流域の急峻な山間部、扇状に広がる下流域の平野部、段状に連なる三方原台地、浜名湖から遠州灘の沿岸部など、それぞれの地域の特色を生かした農林業が営まれている。浜松茶、天竜茶、春野茶といったお茶、三ヶ日みかん、三方原馬鈴薯、次郎柿などのブランドを確立している作物や、全国有数の生産量を誇るガーベラ、国内有数の産地であるセルリーやチンゲンサイ、葉ネギをはじめとした多数の作物が生産されている。

また、市域北部を流れる天竜川とその支流及び都田川の流域では、奈良県の吉野林業地、三重県の尾鷲林業地に並ぶ日本三大人工美林に数えられる「天竜美林」の林業地があり、良質な天竜スギや天竜ヒノキが生産されている。



図1-3-8 山間地の茶畑



図1-3-9 天竜美林

イ.水産業

海水と淡水が入り混じり豊富な栄養分を含む浜名湖は、およそ 800 種もの生物が生息する水産物の宝庫である。特に、ドウマンガニ(ノコギリガザミ)は漁獲量が少なく市場価値の高い食用ガニであり、また、アサリは浜名湖全域で収穫でき、いずれも本市の特産品である。さらに、浜名湖は日本有数の養鰻地であり、カキ(牡蠣)、ノリ(海苔)の養殖地でもある。



図1-3-10 鰻養殖

また、遠州灘を漁場とする市域西部の舞阪漁港では、全国トップクラスの漁獲量を誇るシラスを始め、カツオ、トラフグ、ハモなど、一年を通じて様々な魚介類の水揚げがある。

表1-3-1 魚種別の年間水揚げ時期(浜名湖)

魚種	主な水揚げ場所	漁獲方法	水揚げ時期(月)													
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
アサリ	村櫛・鷺津	採貝漁														
湖アユ	雄踏・鷺津	袋網														
タコ	雄踏・鷺津	袋網・つぼかご														
ガザミ(ワタリガニ)	雄踏・鷺津	袋網														
サヨリ	雄踏・鷺津	袋網														
スズキ・セイゴ	雄踏・鷺津	袋網・刺し網														
クルマエビ	雄踏・鷺津	袋網・タキヤ漁														
クロダイ(シンパを含む)	雄踏・鷺津	袋網・刺し網														
天然ウナギ	雄踏・鷺津	袋網・つぼかご														
アカアシ(クマエビ)	雄踏・鷺津	袋網														
ハゼ	雄踏	袋網														
カキ(牡蠣)	舞阪・新居・白洲	養殖														
ノリ(海苔)	舞阪	養殖														

表1-3-2 魚種別の年間水揚げ時期(遠州灘)

魚種	主な水揚げ場所	漁獲方法	水揚げ時期(月)													
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
シラス	舞阪・新居	2艘船曳き網														
カツオ	舞阪・新居	曳き網														
ハモ	舞阪	2艘船曳き網・底曳														
ガザミ(ワタリガニ)	舞阪	刺し網														
イトヨリダイ	舞阪	船曳・底曳き網														
ヒラメ	舞阪	船曳・底曳き網														
アジ類	舞阪	2艘船曳き網														
サバ類	舞阪	2艘船曳き網														
タチウオ	舞阪	2艘船曳き網・手釣り														
アマダイ	舞阪	刺し網														
アカザエビ(テナガエビ)	舞阪	刺し網・底曳き網														
メヒカリ	舞阪	底曳き網														
タイ類	舞阪	2艘船曳き網														
クロダイ	舞阪	2艘船曳き網														
トラフグ	舞阪	延縄・手釣り														
サヨリ	舞阪	2艘船曳き網														

※両表中の鷺津・新居は湖西市。

②工業

江戸時代から続く綿織物と製材業をルーツとした地場産業が盛んで、繊維、楽器、輸送用機器の三大産業を中心とし、近年では産学官の積極的な連携により、次世代自動車、光・電子技術関連などの高度な技術開発が進みつつある。

また、世界を舞台に活躍する大企業が多数立地する一方で、高度なオンリーワン・ナンバーワン技術を有する中小・ベンチャー企業も集積する。

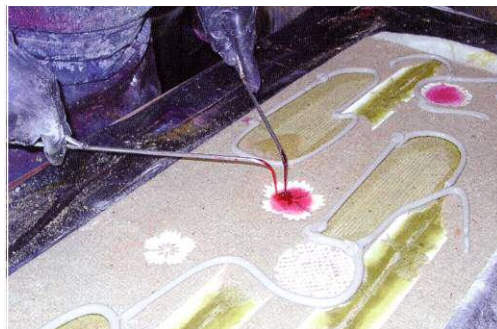


図1-3-11 染色業「浜松注染そめ」

③商業

平成 24 年(2012)経済センサスによると、商店数 7,018 店、従業者数 53,585 人、年間商品販売額 2 兆 3,748 億 9,200 万円となっている。

また、市内で営業している大規模小売店舗(店舗面積 1,000 m²以上)は、平成 29 年 4 月 1 日現在 152 店舗を数え、さらに商店会は 102 を数える。

(5)観光

本市は、首都圏と関西圏のほぼ中間に位置するとともに、愛知県名古屋市が自動車で2時間程度の距離に位置するという、観光地として恵まれた地域である。

こうした環境のなかにおいて、本市は、浜名湖をはじめ、遠州灘、中田島砂丘、天竜川、北遠の山々など、雄大な景色や四季の移り変わりにより様々な表情を見せる自然環境を有するとともに、徳川家康により築城された浜松城や、井伊直虎が出家し歴代の井伊家領主が眠る龍潭寺などの歴史上価値の高い建造物などが多く分布している。また、地域の暮らしのなかに生まれ、長い年月受け継がれてきた特色ある祭礼や民俗芸能などが四季折々に各地で行われ、参加する市民や見学に訪れる来訪者による賑わいが、まちに彩りを添えている。さらに、本市は、海、川、山、里などの様々な地域で収穫された新鮮な食材と、それらを活かした地域色豊かな食文化が大勢の人を惹きつけている。

本市では、自然、歴史、文化、食、レクリエーションなどに関する様々な地域資源が観光資源となり、年間約 1,944 万人の観光交流客数¹、また年間約 235 万人の宿泊客数²(いずれも令和元年度(2019年度))を迎え入れる都市となっている。



図1-3-12 浜松まつり

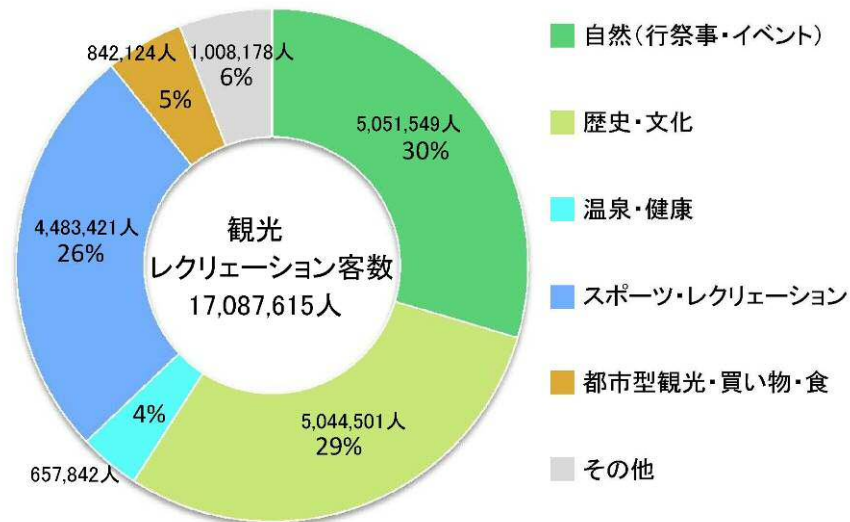


図1-3-13 観光レクリエーション客数の内訳(令和元年(2019))

¹ 観光交流客数は、宿泊客数及び観光レクリエーション客数(観光施設、スポーツレクリエーション施設、観光行事、イベント等への入場者数・参加者数)の延べ人数。 観光交流客数=宿泊客数+観光レクリエーション客数。

² 宿泊客数は、延べ人数。

1-4.歴史的変遷

浜松の歴史は、後期旧石器時代(約 3 万年前～ 1 万年前)に始まるとされる。「^{はまきたじん}浜北人」は約 1 万 8000 年前の本州最古の化石人骨であり、その直接の証拠のひとつとなっている。

浜松では、その後に見られる、移動生活から定住生活へ移り変わる縄文時代(約 1 万年前～ 2300 年前)、環濠集落^{かんごう}が形成された弥生時代(約 2300 年前～ 3 世紀ころ)、古墳の造営や鉄製の武器・農具が作られた古墳時代(3 世紀～ 7 世紀)を素地とし、古代、その後続く中世、近世において形成されていく天竜川中下流域や浜名湖周辺を中心とする人々の暮らしの場に、文化の起こりと蓄積を見ることができる。

近代社会が形成される明治時代から、産業の発展と度重なる市町村合併により行政範囲を徐々に大きくしながら変貌していく浜松にあっても、信仰に基づく祭礼や風習を始め、伝統行事、産業、食などの、地域や人々の暮らしのなかに根付いた歴史文化は今なお息づき、その姿を垣間見ることができる。



図1-4-1 時代区分 (各時代のマスのおおきさは、時代の長さにおおひしたものではありません)

(1)原始

旧石器時代^{ねがた}の根堅遺跡より本州最古の人類「^{はまきたじん}浜北人」が発掘されたことから、当地での生活は少なくとも約 1 万 8000 年前よりあったと考えられている。また**縄文時代**^{しじみづか}の蜷塚遺跡からは、今からおおよそ 4000 年前の集落跡に大規模な貝塚が見つかり、長期に渡る定住生活^{じやうぢゆう}が営まれていたことが考えられている。さらに時代が下って**弥生時代**^{かんごう}には、環濠^{かんごう}を備えた伊場遺跡^{いば}などの集落跡から、木製の鋤や杵、石包丁などの稲作文化を裏付ける品々が出土し、農耕の始まりがうかがえる。

①石器時代・縄文時代 ～浜北人の出現と、移動生活から定住生活へ～

約 400 万年前にアフリカで現れたとされる人類は、長い年月をかけてユーラシア大陸を横断し、大陸東側の海岸に到達した。海を渡り日本列島をはじめとする太平洋の島々にやって来たのが数万年前と考えられている。浜松周辺では磐田原台地(磐田市)に当時の人びとの生活域が顕著に認められるが、市内でも三方原台地^{みかたはら}上の湧水地点から約 2 万年前の石器が出土している(図 1-4-2)。



図1-4-2 浜松市最古の石器

昭和36年(1961)には、浜名区根堅の岩水寺に隣接していた石灰石採掘場(根堅遺跡)で、約1万8000年前と1万4000年前の化石人骨が発見され、「浜北人」と命名された。「浜北人」は、本州では現存する最古の化石人骨だと確かめられている。

旧石器時代の寒冷な気候が、約1万2000年前から温暖化に転じ、動植物相が変化した。市域南部では海面が上昇し佐鳴湖などが入江を形成した。豊富な動植物の狩猟採集と土器による煮炊き調理により、縄文時代には日本列島全体に集落遺跡が展開した。向市場遺跡(天竜区水窪町)、殿畑遺跡(浜名区三ヶ日町)、前平Ⅲ遺跡(浜名区新都田一丁目)など、市内にも大規模な集落跡がある。なかでも、蜷塚遺跡(中央区蜷塚四丁目)は東海地方では最大級の貝塚をともない、地名のとおりヤマトシジミを中心とした貝類を数百年にわたって採取し、丘の上にその殻を積み上げたことがわかっている。自然の恵みを享受し、また再生を願う儀式がこの場で執り行われていたと考えられており、貝塚に墓地が設けられていたのも同様に、新たな生命の誕生を祈る祭祀の一環としてとらえられている。



図1-4-3 蜷塚遺跡出土人骨



図1-4-4 旧石器時代と縄文時代の遺跡

②弥生時代 ～稲作と環濠集落の形成～

原始の地産地消・循環型社会を実現していた縄文時代は、その晩期には寒冷化しつつあった気候変動に対応できず、貝塚が廃絶し、市内でも集落の数が激減する。このころに、大陸から稲作技術をたずさえた人びとが日本列島へ移住したことを契機に、西日本で水田耕作が導入され、紀元前2世紀ごろまでには東海地方まで広がってきた。梶子遺跡(中央区南伊場町)、野際遺跡(中央区宮竹町)などで、小区画の水田が発見されている。2世紀ごろには、椿野遺跡(浜名区都田町)、伊場遺跡群(中央区東伊場二丁目ほか)、芝本遺跡群(浜名区芝本)、飯田遺跡群(中央区飯田町)など、大規模な集落(群)が形成されている。

浜松市内の弥生時代中期から後期の集落跡は、水田耕作という特性から、そのほとんどが市城南部の沖積平野に集中しており、森の恵みを利用していた縄文時代の集落の多くが丘陵上や山間の鞍部に展開していたことと対比をなしている。

伊場遺跡の集落は三重の環濠に囲まれていた。西日本各地に有力な集団が台頭し、勢力争いが始まっており、市域の集落にも緊張関係が生じたことを示している。なお、本市からは大型青銅器である銅鐸が24個出土し、出土地点数としては全国一である。銅鐸は西日本を中心に分布しており、天竜川以東からはほとんど出土していない。浜松は西日本の有力な集団と深く関係していたことが明らかである。この意味で、弥生時代後期の天竜川は金属鑄造などの新技術を得た西日本の勢力と、東日本の伝統的な社会との境にあたっていた。

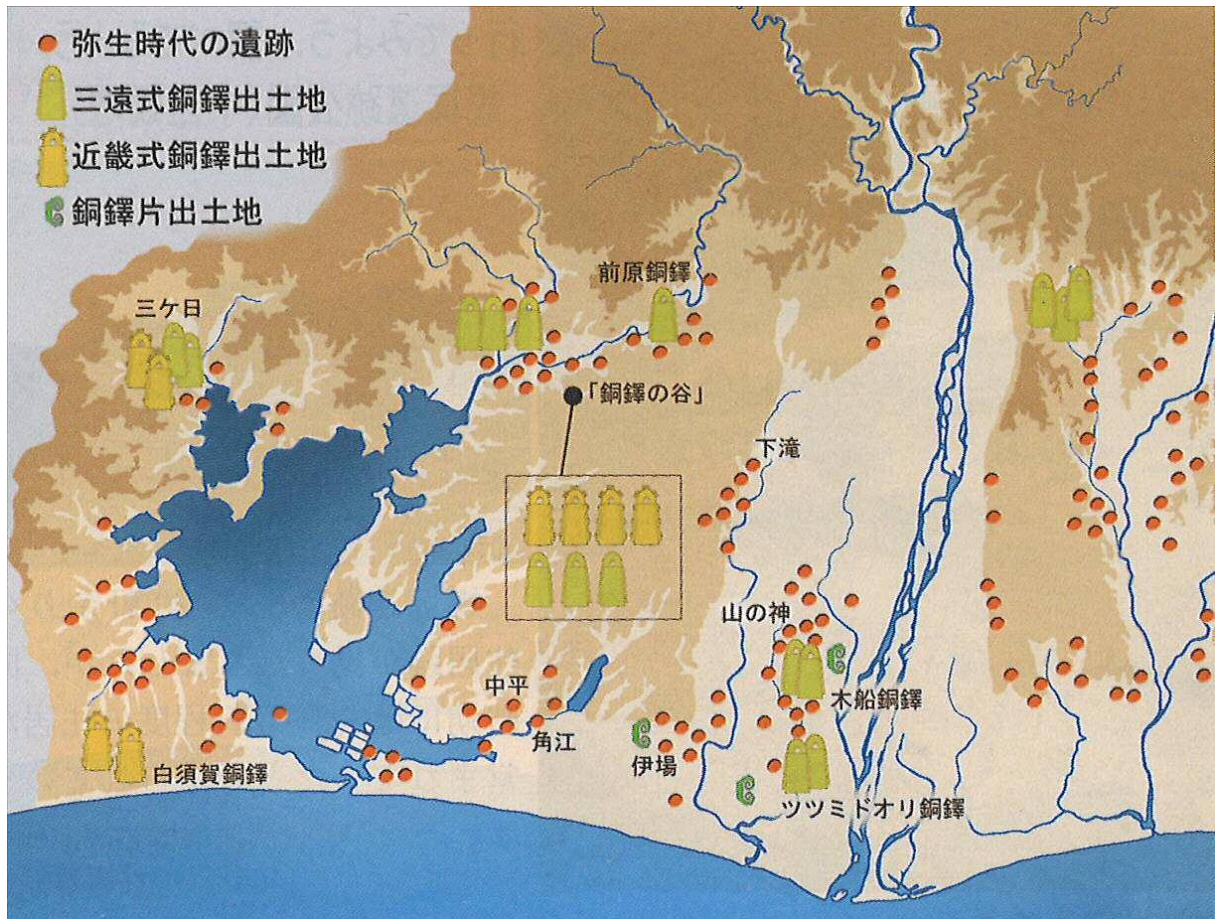


図1-4-5 弥生時代の遺跡

(2)古代

古墳時代では、弥生時代にみられた環濠集落はなくなり、大規模な「むら」が形成され、豪族の館や倉庫など大型の建物が建てられるようになった。また、大和政権の影響が当地にも及び、天竜川流域の光明山古墳のほか、都田川や馬込川沿いなどに多数の古墳が造営された。飛鳥時代(古墳時代終末期)になると、中央政府が進める「律令制」により「遠江国」が置かれ、その中の各地域は地元豪族から選ばれた郡司により統治されるようになった。またこの時代、中央政府との結びつきを強固なものとするため、連絡路や輸送路としての道の整備が進み、浜名湖の北側と南側の2つのルートが設けられ、馬の乗り継ぎを行う駅家が置かれた。奈良時代になると仏教信仰が広がり、市内最古と言われる木船廃寺や、文武天皇の命により建立されたとされる頭陀寺など多数の寺院が建立された。さらに時代が下って平安時代になると、「墾田永年私財法」が取り入れられたことで、貴族や社寺、豪族などが広大な私有地「荘園」を持つようになり、当地にも「市野荘」、「都田御厨」、「蒲御厨」などができた。一方で、貴族や社寺など有力者が所有する「荘園」の成立は、自らの土地を守るため武装した武士を登場させた。

① 古墳時代 ～大規模なむらの形成と古墳の造営～

古墳時代になると、弥生時代に見られた環濠集落の形態はなくなり、大規模なむらが形成されるようになった。中平・坊ヶ跡遺跡(中央区西鴨江町)や大平遺跡(中央区入野町)からは、大型の建物跡や倉庫跡と、農民の住居跡が多数発掘されている。大型の建物跡は、豪族の館跡あるいは祭りを行うためのものであったと推測されている。なお、天白磐座遺跡(浜名区引佐町)、山ノ花遺跡(中央区恒武町)、中津坂上遺跡(浜名区都田町)、東前遺跡(中央区志都呂町)では、祭りを行った跡が確認されている。

この時代には、奈良盆地におかれた大和政権の勢力が浜松にも及び、古墳の造営が始まる。そうした古墳の多くは、都田川や馬込川に沿って分布している。

古墳時代前期の4世紀前半、北岡大塚古墳(浜名区引佐町)が都田川支流の井伊谷川上流に造営され、4世紀終わりには赤門上古墳(浜名区内野)が馬込川上流、馬場平古墳(引

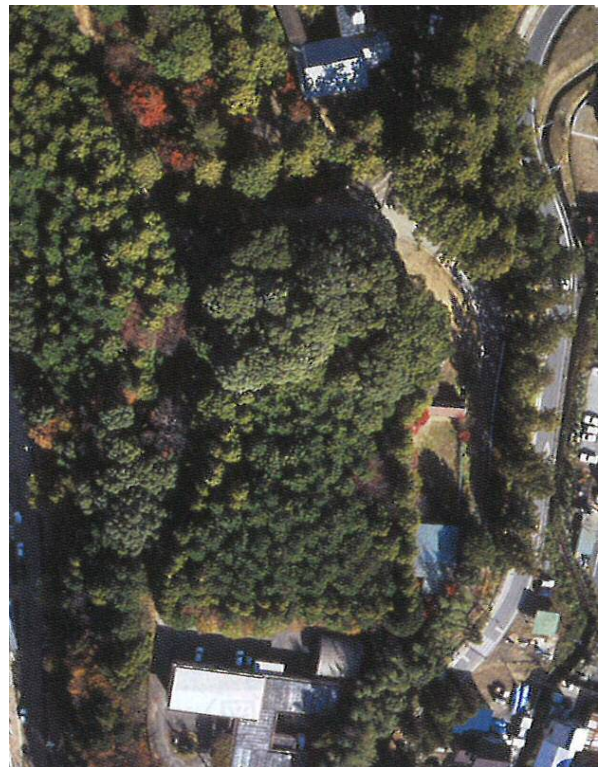


図1-4-6 光明山古墳

佐町)が井伊谷川上流に造営されている。いずれも前方後円墳である。

古墳時代中期の5世紀後半に造営された市内最大規模(全長 83 メートル)を有する前方後円墳の光明山古墳(天竜区山東)は、その立地と規模から被葬者は山間部への交通路を掌握していた勢力者であると考えられている。同時代には、陣座ヶ谷古墳(浜名区細江町)が都田川下流に造営されている。また、5世紀後半、馬込川中流に造営された市内最大規模(直径 49 メートル、高さ 7.2 メートル)を有する円墳の千人塚古墳(中央区有玉西町)は、天竜川右岸地域を支配していた豪族一族の墓と考えられている。

古墳時代後期の6世紀になると、それまでの古墳が豪族の墓であったのに対し、有力農民の墓としても用いられ、それらは小型化するとともに、多数造営されるようになった。6世紀終わりには、三方原台地の東縁や浜名湖東岸の根本山周辺に数百基の小型円墳が造営されている。なお、これまでに造営された古墳のほとんどが市域南部に集中していたが、この時期の古墳のなかには、仇山古墳(天竜区春野町)のように市域北部の山間地に造営されたものも見られる。



図1-4-7 古墳時代の集落跡



図1-4-8 大規模なむらと造営された古墳

②飛鳥時代(古墳時代終末期) ～律令制の成立と交通網の整備～

7世紀後半、地方は中央政府が唐より取り入れた政治制度「律令制」により「国-郡-里」¹に分けられ、管理されるようになった。浜松一帯から大井川以西にかけては、遠淡海国造、素賀国造、久努国造の地元豪族による支配地があったが、律令制により「遠江国」として一つに統合され、磐田市に国府(国の役所)が置かれた。

飛鳥時代に続く奈良時代には、遠江国を管轄する10郡(後に分割して13郡となる)のうち、現在の浜松市域には、敷智郡、長田郡(和銅2年(709)に長上郡と長下郡²の2郡に分割)、引佐郡、鹿玉郡、浜名郡、周智郡、磐田郡(元慶5年(881)に山香郡が分離)の7郡(後に9郡となる)の一部または全部が含まれ、各々地元豪族から選ばれた郡司により郡内の政治が行われた。

また、この時代、中央政府と地方の結びつきを強固なものにするため、また軍事面の強化のため、連絡路や輸送路としての道の整備が進んだ。国家によって整備、管理、維持された官道では、馬の乗り継ぎなどを行う駅家が約16キロメートル間隔で道沿いに置かれ、中央政府から地方への命令を持った役人が馬を乗り継いで伝達する仕組みが整えられた。

浜松市域では、浜名湖の北側を通る北岸ルートと南側を通る南岸ルートが整備され、北岸ルートでは板築駅(浜名区三ヶ日町、別説あり)が置かれ、南岸ルートでは栗原駅(中央区南伊場町付近、別説あり)が置かれた。



図1-4-9 古代の東海道を推定

奈良時代の東海道は、天竜川平野の条里の基線だった。遠江国府が中泉から見付へ移転したこと、度重なる天竜川の洪水によって、古代東海道は分断された。江戸時代の本坂通(姫街道)も浜名湖北回りの古代街道の名残といえる。

¹ 「こく-ぐん-り」、あるいは「くに-こおり-さと」。

² 長上郡と長下郡は、長田上、長田下(ながたのかみ、ながたのしも)を2字に省略した表記、「ながかみ、ながしも」と省略。

③奈良時代 ～浜松という地名の由来は奈良時代の「濱津」～

浜松という地名をさかのぼると、鎌倉時代に阿仏尼が著した紀行文『十六夜日記』には、「ひくま(ひきま)」という都市の名があり、その周辺のおおかたの名を「はま松(浜松)」というときき記す。さらに古い時代となると、当時の百科事典『和名類聚抄』の平安時代後期の写本には「濱津」という地名が見えるが、同じ事典の室町時代の写本には「浜松」とあり、その読み仮名として「波万万都」と添え書きがあるなど異同が見られる。1970年代に、浜松市伊場遺跡で、奈良時代の遠江国敷知郡の役所跡を発掘したところ、「濱津」と記した木簡が出土し、奈良時代には「濱津」という地名だったことが確定した。この遺跡の発掘調査で見つかった木簡は百枚を超え、それまで限られた文献に頼らざるを得なかった古代史の研究に新たな地平を開いた。地中から出土した新発見の豊富な文字資料として注目される画期的なできごとになった。

『和名類聚抄』は原本がすでに失われ、各時代の写本が伝わっている。現在の本市に関わると思われる地名も多く掲載されており、その一部には前述したように異同が見られる(表1-4-1参照)。奈良時代以降は国一郡一郷が行政単位となるが、これらの地名には、漢字の表記は異なることがあっても、現存地名に比定することができるものがあり、市内の集落のものが遠く千数百年前には形成されていたことがわかる。

なお、本市を含む静岡県西部の旧国名「遠江」や、旧郡名の「引佐」や「籠玉」、「長上」、「磐田」、「周智」なども、奈良時代からつづく行政界にあたり、いずれも1300年余の歴史を有する古い地名である。

また郡を構成する郷名についても『和名類聚抄』に記載される。例えば遠江国引佐郡の「渭伊」は現在の井伊谷を中心とした地域とみられる。伊場遺跡の木簡にも「京田(現都田地区)」や「和治(現和地地区)」などがあり、10世紀代の文献と8世紀代の木簡が対応している。

広く見れば、国名である「遠江」は、「近江(滋賀県)」と対になる地名である。もともとはそれぞれ「遠淡海」、「近淡海」と表記し、当時の京都人が京都から見て近いところにある湖水である琵琶湖と、遠いところにある浜名湖に相似形を認めたものである。奈良時代の浜名湖は今切を生じておらず、浜名川で遠州灘に通じる淡水湖と認識されていた。

「濱津」も字義から見れば浜辺の港という意味であり(別説有)、当時の遠州灘にあった海上交通の拠点となった集落だと推定される。これら古代の地名から、当時の浜松市域の景観が類推できるのである。

図1-4-10 「濱津」木簡(奈良時代)



表1-4-1 『和名類聚抄』による浜松市付近の郡名と郷名 写本による異同を比較

写本 郡名	高山寺本 平安末期の写本 12世紀	大東急記念文庫本 室町中期の写本 15世紀	名古屋市博物館本 永禄九年の写本 1566年	元和古活字本 元和三年 1617年
浜名郡 波万奈	坂本 大神 駅家 贄代 英多 宇智	坂上 坂本 大神 駅家 贄代 英多 宇智	坂本 坂下 大神 駅家 贄代 英多 宇智	坂上 坂本 大神 駅家 贄代 英多 宇智
敷知郡 〔敷智郡〕 淵	蛭田比留多 赤坂安加佐賀 象嶋 柴江之波江 小文 竹田 雄踏 海間阿万 和治 浜津	蛭田比留多 赤坂阿加佐賀 象嶋 柴江之波江 小文 竹田太介多 雄踏 尾間於万 和治 浜松波万万都 駅家	蛭田ヒルタ 赤坂アカサカ 象嶋 柴江シハエ 小文 竹田 雄踏 海間アマ 和治 浜津 駅家	蛭田比留多 赤坂阿加佐賀 象嶋 柴江之波江 小文 竹田太介多 雄踏 尾間於万 和治 浜松波万万都 駅家
引佐郡 伊奈佐	京田美夜古太 刑部 渭伊為以 伊福以布久	京田美也古多 刑部於佐加倍 渭伊井以 伊福以布久	京田ミヤコタ 刑部 渭伊イ、 伊福イフコ	京田美也古多 刑部於佐加倍 渭伊井以 伊福以布久
龜玉郡 阿良多末 今称有玉	三宅 碧田安乎多 霸田反田 赤狭阿加佐	三宅美也介 碧田安乎多 霸田反多 赤狭阿加佐	三宅 碧田アヲタ 霸田ハタ 赤狭アカサ	三宅美也介 碧田安乎多 霸田反多 赤狭阿加佐
長上郡 長乃加美	茅原知波良 碧海阿乎宇三 長田 河辺加波へ 蟾沼比支奴末 壺志以知之	茅原加波良 碧海安乎宇美 長田奈加多 河辺加波乃倍 蟾沼比木奴万 壺志以知之	茅原チハラ 碧海アヲウミ 長田 河辺カハへ	茅原加波良 碧海安乎宇美 長田奈加多 河辺加波乃倍 蟾沼比木奴万 壺志以知之
豊田郡 止與太 国府	(掲載なし)	(掲載なし)	府 蟾沼ヒキヌマ 壺志イチシ	(掲載なし)
長下郡 准上	大田 長野奈加乃 貫名沼岐奈 伊筑 幡多判多 大楊 老馬於以万 通限止保利久万	太田 長野奈加乃 貫名奴木奈 伊筑 幡多判多 大楊於保也奈木 老馬於以万 通□止保利久万	大田 長野 貫名ヌキナ 伊筑 幡多 大楊 老馬ヲヒマ 通限トヲリクマ	太田 長野奈加乃 貫名奴木奈 伊筑 幡多判多 大楊於保也奈木 老馬於以万 通熊止保利久万
磐田郡 伊波太	飯宝 曾能 山香 入見 小野 千柄 高苑 壬生 野中 久米 小谷 飯宝 豊国	飯宝 曾能 山香 入見 小野乎乃 千柄 高花 壬生尔布 野中乃奈加 久米 小谷 飯宝 神戸 豊国止与久尔 駅家	飯宝 曾能 山香 入見 小野 千柄 高苑 壬生 野中 久米 小谷 飯宝 神戸 豊国 駅家	飯宝 曾能 山香 入見 小野乎乃 千柄 高花 壬生尔布 野中乃奈加 久米 小谷 飯宝 神戸 豊国止与久尔 駅家
山香郡 也末加	大峯 与利 岐階 氣多	大峯 與利 岐階 氣多	大岑 与利 岐階 氣比キヒ	大峯 與利 岐階 氣多
周智郡	小山 山田 依智 大田 田椀	小山乎也万 山田也万多 依智江知 大田於保多 田椀	小山ヲ 山田 依智 大田 田椀	小山乎也万 山田也万多 依智江知 大田於保多 田椀

※『和名抄』高山寺本郷里部の巻頭に「有郡謂之郡家謂之駅家以寄諸社謂之神戸不入班田謂之余部異名同除而不載」とあり、高山寺本では駅家・神戸等の郷名が一部省略されているとの指摘がある。

※※『倭名類聚抄』大東急記念文庫本他郡名中に「龜玉（阿良多末、今称有玉）」と記載される。また、「豊田（士与太、国府）」とあるが、郷名部にはこの郡名と所属する郷名が記載されていない。

④平安時代～荘園と御厨～

中央政府が7世紀後半に取り入れた公地公民制は、自然災害や農民の田畑放棄を起因とした農地の荒廃、人口増加に対する分配農地の不足などを原因として立ち行かなくなった。

天平15年(743)に、新たに開墾した土地の永代私有を認める「墾田永年私財法」^{てんぴょう}が出されて以降、貴族や有力な社寺が開墾を進め広大な私有地を持ち荘園^{しょうえん}が成立する。

地方の豪族などは、国衙^{こくが}の干渉を逃れるため、中央の有力な貴族や社寺に自らの荘園を寄進して保護を求め、また權益を守るための武装化が始まった。

市域南部は荘園が林立した地域で、また伊勢神宮の荘園にあたる御厨^{みくりや}が多いことも特色である。市域北部(山間部)には山香荘^{やまかのしょう}が成立している。

古記録に見える範囲では、天竜川流域の荘園・御厨からは米のほか綿や紙が上納され、浜名湖岸からは米のほか絹が上納されていた。また浜名湖北岸で都田川河口の刑部御厨からは魚が上納されており、湖畔の舟を活用した生業の一端が知られる。浜名神戸にある初生衣神社^{はまなかんべ}では、伊勢神宮へ奉納する絹織物を三河経由で運ぶ「おんぞ祭り」を継承している。

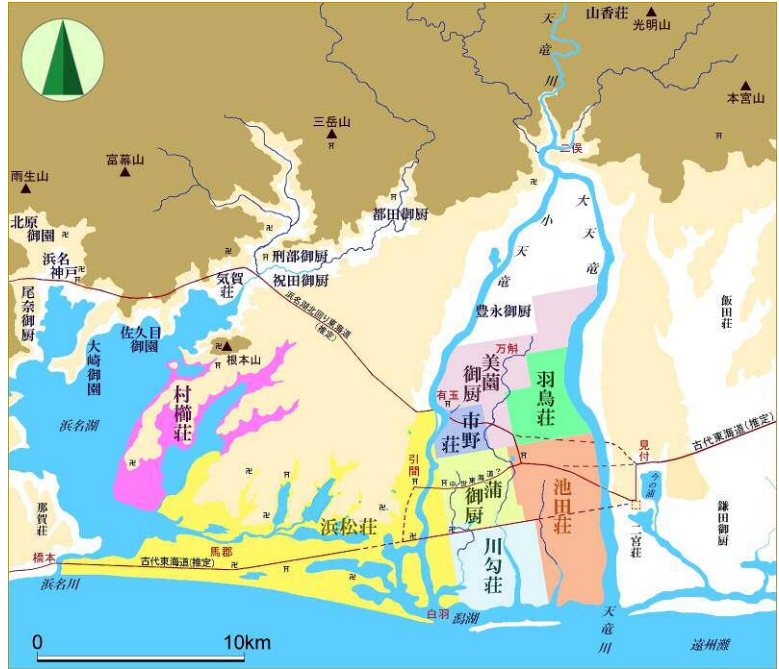


図1-4-11 浜松市南部の主な荘園

表1-4-2 浜松市及びその周辺の主な荘園・御厨

名称	郡名	領主	現在地(代表的な地名)
市野荘	長上	貞観寺領	浜松市中央区市野町ほか
高家荘	長下	貞観寺領	不明、頭陀寺荘の一部か
池田荘	豊田	松尾社領	浜松市中央区、磐田市南西部
羽島荘	豊田・長上	新熊野社領	浜松市中央区
頭陀寺荘	長下	高野山領	浜松市中央区、磐田市南西部
川勾荘	長下	頭陀寺領	(頭陀寺荘と同じ)
山香荘	山香	長講堂領	浜松市天竜区、榛原郡川根本町
気賀荘	引佐	七条院領	浜松市浜名区細江町ほか
飯田荘	周智	蓮華王院	周智郡森町
那賀荘	不明	高野山領	不明、湖西市中ノ郷付近か
浜松荘	敷智	室町院領・安嘉門院領	浜松市中央区ほか
忝荘(吉美)	敷智	不明	湖西市吉美
村櫛荘	敷智	最勝光院領	浜松市中央区庄内地区ほか
笠井荘	長上	室町幕府領	浜松市中央区笠井地区ほか
尾奈御厨	浜名	伊勢皇大神宮	浜松市浜名区三ヶ日町尾奈
浜名神戸	浜名	〃	浜松市浜名区三ヶ日町岡本
大崎御園	浜名	〃	浜松市浜名区三ヶ日町大崎
北原御園	浜名	〃	浜松市浜名区三ヶ日町福長
大墓御厨	浜名	〃	浜松市浜名区三ヶ日町付近
佐久目御園	浜名	〃	浜松市浜名区三ヶ日町佐久米
但木御園	浜名	〃	浜松市浜名区三ヶ日町只木
都田御厨	引佐	〃	浜松市浜名区都田地区
祝田御厨	引佐	〃	浜松市浜名区細江町祝田
刑部御厨	引佐	〃	浜松市浜名区細江町刑部
美園御厨	長上	〃	浜松市浜名区西美園ほか
豊永御厨	長上	〃	浜名区内野・小松ほか
蒲御厨	長上	〃	浜松市中央区蒲地区ほか
池田御厨	豊田	〃	浜松市中央区または磐田市

(3)中世

鎌倉時代、文治元年(1185)の守護・地頭補任により、御家人(武士)が領地を支配するようになった。前代に平氏一門が国司を務めた遠江には、甲斐源氏の安田義定がいったん守護として入ったが、狼藉で誅殺され北条得宗家の領国となっていった。京と鎌倉を結ぶ東海道の宿駅として、引間宿が栄えた。**南北朝時代(室町時代前期)**には、後醍醐天皇の南朝方と足利尊氏の北朝方が対立する南北朝の争いで三岳城が南朝方の拠点となるなど、浜松も戦場の一つとなった。両朝合一後、遠江の守護は今川氏、仁木氏、斯波氏が務めている。応仁元年(1467)、応仁の乱が起こり、浜松においても東軍、西軍の敵味方に分かれ、下克上の**戦国時代(室町時代後期～安土桃山時代前期)**に突入する。駿河守護今川義忠の嫡子今川氏親が、幕府と将軍家より遠江守護に任じられ、遠江・尾張守護であった斯波氏との戦いに勝利し、遠江を平定した。その後、今川氏により引間城は維持されるものの、内紛を繰り返したのち、徳川軍に接收され、それまで岡崎城を居城としていた徳川家康が引間城に入城して「引間」を「浜松」に改名した。

①鎌倉時代

ア.浜松荘と引間宿

平安時代に広がった荘園の一つに浜松荘がある。鎌倉幕府が成立し、京都と鎌倉を結ぶ東海道を行き来する旅人が増加したことから、当時の東海道が天竜川(現在の馬込川付近)を渡る水陸交通の結節点に位置し、市を開くのに適した引間¹の宿が栄えた。現在も、「船越」や「早馬」という地名が見られるのは、その名残りである。引間宿は浜松荘の中核神社である浜松八幡宮の門前に発達した。阿仏尼が弘安2年(1279)の旅を記した『十六夜日記』には、「今宵は引馬の宿という所に留まる。この所の大方の名は浜松とぞ言ひし。」とある。

イ.仏教の広まり

平安時代から鎌倉時代にかけて、既に建立されていた鴨江寺(中央区鴨江四丁目)を始め、竜禅寺(中央区竜禅寺町)、頭陀寺(中央区頭陀寺町)、華蔵寺、大福寺、摩訶耶寺(いずれも浜名区三ヶ日町)などの密教系寺院が栄えていた。頭陀寺は、京都仁和寺の荘園であった川勾¹の現地荘官として経営にあたった。浜松荘では荘域の東半に浜松八幡宮と鴨江寺があり、佐鳴湖を挟んだ西半に神ヶ谷八幡宮(現賀久留神社、中央区神ヶ谷町)と西鴨江寺(廃寺、町名は現存)があった。他にも建保5年(1217)7月7日製作の本尊を有する岩水寺(浜名区根堅)などがあり、根本山を中心とした地域には、大山寺(中央区大山町)、大日堂(同村櫛町)、妙光城寺(同大久保町)などの有力寺院が所在した(いずれも廃寺)ことがわかっている。なお、現存する諸寺の宗派は真言宗である。

¹ 「ひくま」(あるいは「ひきま」)の表記には、引馬・疋馬・匹馬・引間などがあって安定しない。本章以降では、「引間」に統一して表記する。現行地名の「曳馬」は場所が異なる。(後述)

臨濟宗は、建徳2年(1371)に無文元選が奥山に方広寺(浜名区引佐町)を建ててから盛んになった。また、15世紀初め、華藏義曇により建立された普濟寺(中央区広沢一丁目)から十三派が生じた曹洞宗は、寺院数を急激に増やした。寺院数は少ないが、日蓮宗では橋羽の妙恩寺(中央区天竜川町)、浄土宗では西伝寺(中央区西伝寺町)、時宗では阿弥陀寺(中央区三島町)など、当時の街道筋や市場といった物資の集散地を中心に教線を伸ばしていたことが想像される。

②南北朝時代(室町時代前期)

ア.南北朝対立の戦場

元弘3年(1333)、足利尊氏は、後醍醐天皇の命を受けて挙兵し、鎌倉幕府を攻め落とした。しかし、公家を重視した政治を行うなど後醍醐天皇に対する不満を抱いていた尊氏は、建武2年(1335)、北条氏残党による反乱を制圧したものの鎌倉に留まり、独自の武家政権創始の動きを見せた。これに対し、後醍醐天皇が新田義貞を尊氏討伐に向かわせたことで、後醍醐天皇の南朝方と光明天皇を擁立した尊氏の北朝方が対立する南北朝時代が始まった。井伊家が南朝方についた西遠江では、北朝方の今川範国と建武4年(延元2年、1337)に、三方原で争いとなった。遠江を南朝方の重要な拠点と考える後醍醐天皇は、皇子の宗良親王を派遣し、親王を擁した井伊氏は本城とする三岳城の他、大平城、千頭峯城などを配して防備を固めた。暦応2年(延元4年、1339)から尊氏の命を受けた高師泰らに攻められ、これらの城はつぎつぎに落城し、暦応3年(興国元年、1340)には南朝方の拠点は落城した。遠江は仁木義長を経て今川範国が守護となり北朝方の支配下となった。湖北の浜名氏は、大福寺とともに北朝方につき、摩訶耶寺を含め千頭峯城を拠点とした井伊家をはじめとする南朝方に押されていたが、暦応2年の千頭峯城をめぐる攻防に参戦し、以後、湖北一帯を勢力下として佐久城を本拠とした。また、蒲御厨の惣検校であった蒲清保も北朝方として従軍した。美蘭御厨のうち万斛の澤木屋敷や市野砦は、今川氏の遠江攻略の拠点となっていた。北遠・山香荘を拠点とした天野氏は本流が北朝方、庶流が南朝方に回るなど、一族の対応が分かれている。



図1-4-12 南北朝時代における浜松周辺の城と合戦

¹ 宗良親王 後醍醐天皇の皇子。兄に後村上天皇ら、弟に奥山方広寺を開創した無文元選らがいる。親王の名前については、現在「むねよし」と読むことが多いが、本章以下では、地元で広く知られている「むねなが」で統一している。

イ.守護大名斯波氏による統治

南北朝の対立は全国で次第に北朝方が優勢となり、元中9年(明德3年、1392)、南朝第4代ごかめやまてんのうの後龜山天皇が北朝第6代ごこまつてんのうの後小松天皇に譲位するかたちで両朝ごういつが合一した。

前代の鎌倉幕府につづき室町幕府における各国の警備や治安維持などを担う役職である守護は、北朝方の足利一族で多くが占められており、遠江の守護は、今川氏、仁木氏、斯波氏らが務めている。

斯波氏は、将軍を補佐し内外の政務を統轄する役職である管領かんれいでもあり、越前、尾張、遠江の各国の守護を兼務していた。このため、斯波氏自身は京都で将軍に直接仕え、遠江には守護代しゅごだいを置いた。斯波氏以前に遠江の守護を兼ねていた今川氏は、領地回復を期して斯波氏の守護代らと攻防をたび重ねることとなった。

表1-4-3 歴代の遠江国守護

氏名	法名	官職名・呼名	在任期間
今川範国	心省	五郎入道	元弘 3年(1333) - 暦応 1年(1338)
仁木義長		右馬権助	暦応 2年(1339) - 康永 2年(1343)
千葉貞胤		千葉介	康永 2年(1343) - 観応 2年(1351)
仁木義長		右馬権助	観応 2年(1351)
今川範氏		上総介	正平 7年(1352)
今川範国	心省		正平 7年(1352) - 貞治 4年(1365)
今川貞世	了俊	伊予守	永和 4年(1378)
今川範国	心省		康暦 1年(1379) - 至徳 1年(1384)
今川貞世	了俊	伊予入道	至徳 1年(1384) - 嘉慶 2年(1388)
今川仲秋	仲高		嘉慶 2年(1388) - 応永 6年(1399)
今川泰範	法高	上総介	応永 6年(1399)
斯波義教(重)	道孝	右兵衛督	応永 12年(1405)
斯波義淳	道忠	左兵衛佐 治部大輔	応永 26年(1419) - 永享 5年(1433)
斯波義郷	道慶	治部大輔	永享 5年(1433) - 永享 8年(1436)
斯波義健	道寿	治部大輔	永享 8年(1436) - 享徳 1年(1452)
斯波義敏	道海	左兵衛佐	享徳 1年(1452) - 寛正 1年(1460)
斯波松王丸		(義良・義寛)	寛正 1年(1460) - 寛正 2年(1461)
斯波義廉		治部大輔	寛正 2年(1461) - 文正 1年(1466)
斯波義敏		左兵衛佐	文正 1年(1466)
斯波義廉		治部大輔 左兵衛佐	文正 1年(1466) - 文明 2年(1470)
斯波義寛		左兵衛佐	延徳 3年(1491) - 文亀 1年(1501)
斯波義達			永正 5年(1508)
今川氏親	貫公	修理大夫	永正 5年(1508) - 大永 6年(1526)
今川氏輝	去公	五郎	大永 6年(1526) - 天文 5年(1536)
今川義元	哲公	治部大輔 三河守	天文 5年(1536) - 永禄 3年(1560)
今川氏真	栄公	治部大輔 上総介	永禄 3年(1560) - 永禄 12年(1569)

③戦国時代(室町時代後期～安土桃山時代前期)

ア.応仁の乱と今川氏親による遠江平定

室町幕府の将軍の権力も次第に衰え、15世紀半ばになると、8代将軍義政の跡継ぎを巡る争いが起こり、これに有力な守護大名の権力争いが複雑に絡み合っ、応仁元年(1467)、応仁の乱が起こった。この戦乱は全国に広がり、幕府の支配や荘園制は崩れ、下剋上の戦国時代に入っていった。

浜松では、この戦乱で遠江守護斯波氏の家臣が分裂し、斯波義敏が東軍、斯波義廉が西軍となり互いが刀を交えるようになった。このとき、駿河守護今川義忠が西軍義廉の勢力を抑えるため遠江に進軍したことで、遠江は斯波氏と今川氏の戦場となった。

文明8年(1476)、今川義忠は、遠江の横地四郎兵衛と勝間田修理亮の両氏を討った帰途、小笠原塩買坂(現在の菊川市)で残党に夜襲され戦死している。その後、跡を継いだ嫡子今川氏親は、母の北川殿の弟である伊勢新九郎(北条早雲)の補佐を受けて遠江へ進出し、天竜川以西(西遠江)まで勢力を伸ばした。

永正5年(1508)、氏親は、正式に幕府と将軍家から遠江守護に任じられ、遠江支配の大義名分を得た。永正8年(1511)、遠江・尾張守護の斯波義達(しほよしたつ)が今川方の刑部城(浜名区細江町)を攻めたことに対し、氏親は出陣してこれを退けたものの、義達はなおも攻撃を続けたため、遠江での斯波氏と今川氏の戦いが激化した。

永正13年(1516)、引間城を攻めて占拠し、籠城していた大河内貞綱、弟の巨海道綱、合流した斯波義達に対し、永正14年(1517)、氏親は、引間城を包囲するとともに、安倍金山の鉾夫を使って坑道を掘り、水の手を絶って降伏させたという逸話がある。貞綱ら兄弟は自害、義達は出家し尾張へ送還され、遠江は氏親により平定された。氏親は、反今川勢力との抗争途中より、今川一門などを遠江の拠点となる支城に配置していた。二俣(天竜区)に瀬名氏・松井氏、掛川に朝比奈氏、宇津山(湖西市)に瀬名氏・朝比奈氏、そして大河内氏没落後の引間城には飯尾氏を配置した。

なお、引間城は、現在の浜松城の前身の城であり、築城時の城主は不明である。江戸時代作成の城絵図に「古城」と記された城郭北東角が、引間城跡である。(江戸時代の浜松城の全体は図1-4-17参照。)



図1-4-13 江戸時代の浜松城絵図にみる引間城跡 画面右には支城跡がある。

イ.引間宿の発展

東海道の要衝として発展してきた引間宿は、15世紀に入り、元々の宿としての機能のほか、馬込川と東海道が交わる地点に近く、市を開くのに適した場所であったことから商業機能を備え、遠江国府がある見付(現磐田市)をしのぐ中世都市となっていく。

万里集九は、詩文集『梅花無尽蔵』に、文明17年(1485)、吉美(湖西市吉美)から舟で浜名湖を渡り、三方原を眺めて引間に滞在した様子を「引間、市ハ富ミテ屋ハ千区」(引間の市は繁栄し、千軒ほどの家がある)と記している。また、集九は、二俣栗を持参した知人と引間宿で酒宴をもうけたことも記している。これは、二俣(天竜区)の栗のことであり、当時遠江の名産として京都の寺院日記(『鹿苑日録』(永正元年(1504)))にも記されるほどであった。



図1-4-14 引間宿の鳥観図(推定) 西側の犀ヶ崖付近から東に、引間城、引間宿を経て当時の天竜川を望む。

ウ.浜松城の誕生

永正14年(1517)の今川氏による遠江平定後、今川氏に京都より招かれてきた飯尾賢連が引間城に入り、乗連、連龍と3代続いた。永禄3年(1560)桶狭間で今川義元が戦死すると、徳川家康が今川氏から独立し、三河の統一をはかった。飯尾連龍も勢力が衰退する今川氏を見限り、家康と通じようとしていた。これを知った今川氏真は、永禄5年に引間城を攻めるが落とせず、いったん和睦したが、永禄8年には連龍を駿府へ呼び寄せて誅殺する。これにより残された家臣団は動揺し、むしろ家康の遠江侵攻が前進していくことになる。

永禄11年(1568)、引間城は三河から侵攻した徳川軍によって接收され、家康の遠江攻略の

拠点となった。永禄 12 年(1569)には、家康が浜名湖東岸の宇布見・中村源右衛門屋敷に入り、その翌日に佐鳴湖東岸の普濟寺に一泊してから引間城に入城している。浜名湖西岸から舟運で湖の南部を渡り新川から佐鳴湖を経て、小藪河岸から上陸し普濟寺を経て城下へ到達したことがわかる。元龜元年(1570)、家康はそれまで居城としていた岡崎城を嫡子信康にまかせ、自らは引間城に入城して「引間」を「浜松」と改名した。同時期に駿河の今川氏は武田信玄の侵攻によって、戦国大名としての最後を迎えた。家康は浜松城を前線として駿河を手中にした信玄と対峙することになり、家臣団とともに城の増改築を急いだ。

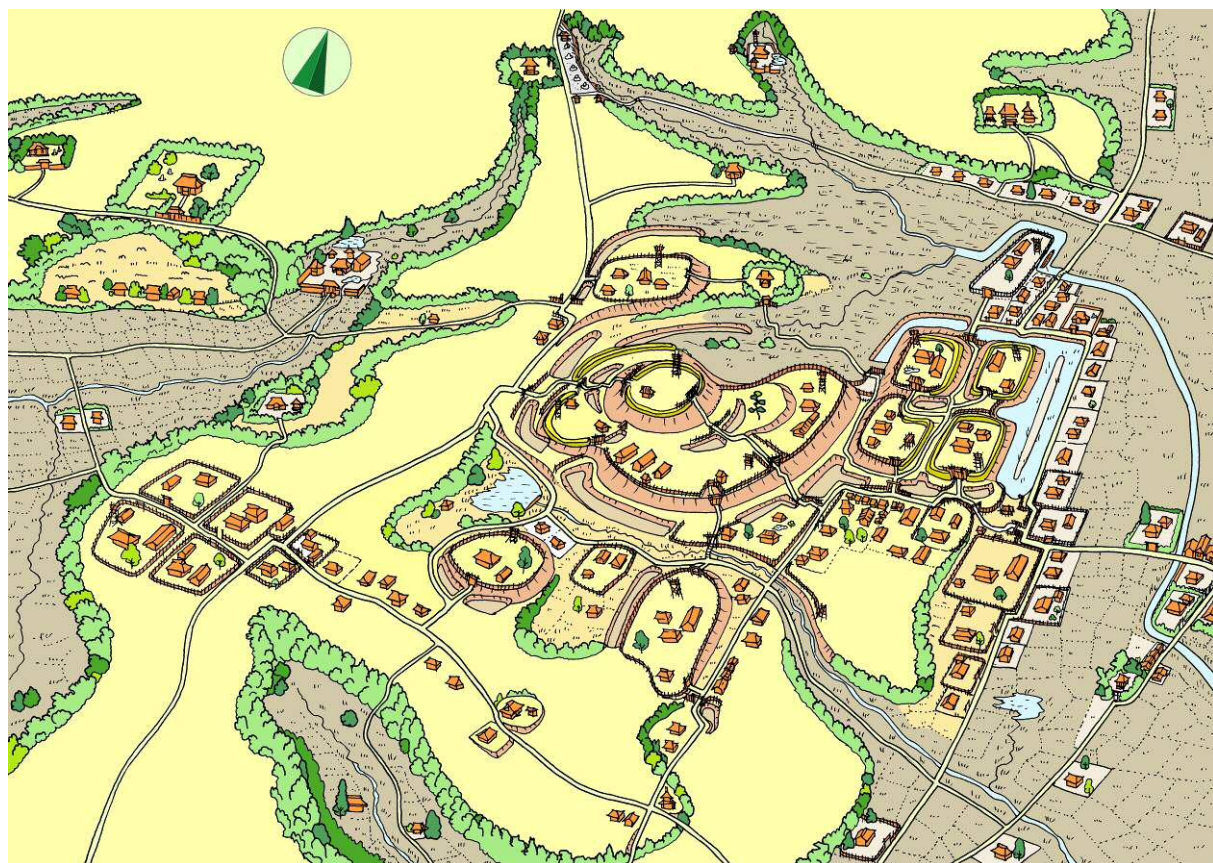


図1-4-15 家康が入城したころの浜松城(想像図) 画面右中央の引間城から、西の台地上に拡張している。

浜松城は、元龜元年(1570)の段階では戦国大名の居城として十分ではなかった。三方ヶ原の合戦を経て、天正 6 年(1578)、天正 7 年(1579)、さらには天正 9 年(1581)と次々に増改築されている。家康は浜松在城 17 年間で、一戦国大名から五か国持ちの大大名までに勢力を拡大し、豊臣秀吉に対抗できる天下のナンバー 2 と目されるようになった。浜松城もその居城として、次第にその姿が壮大になっていった。

エ.三方ヶ原の戦い

元龜 3 年(1572)、大軍を率いて甲府を出た武田信玄は、自軍を複数の隊に分けて遠州に進行させ、一言坂(磐田市)の戦い、二俣城(天竜区二俣町)の戦いで家康に勝利し、天竜川を渡って三方ヶ原へ進出した。しかし、信玄は、家康のいる浜松城を無視するかのよう

原を通過し、別隊として東三河へ向かっていた山県昌景と合流しようとしていた。

家康は、浜松城から出兵し、三方ヶ原を通過する武田軍を背後から突こうとするも、待ち構えていた武田軍に大敗し、家康は討死寸前まで追い詰められて浜松城に帰還した。

ところが、三方ヶ原の戦いで勝利した信玄は、その後浜松城を攻撃することなく西進し、刑部(浜名区細江町)を通り、東三河の野田城(新城市)を攻めている。



図1-4-16 三方ヶ原合戦前後の武田信玄の侵攻ルートと、想定される支配域(赤枠内) 本多説をもとに作図。

三方ヶ原の戦い前夜の遠江の動静は、安堵状の日付などから武田軍が着実に支配域を広げていたことが判明しており、遠江のほとんどは武田軍に支配されている状況だった。織田・徳川連合軍にとって、浜松城はまさにかろうじて遠江に確保した前線基地という緊迫感の渦中にあった。武田軍は、浜松城南西の鴨江寺にも入ったことが領国へ持ち帰った鏝口の銘から判明している。

この時代にも東海道は浜名湖の南回りと北回りの2つの道があり、家康は三河の本拠と尾張を結ぶ南回りの東海道を確保していたが、信玄は三河北部や美濃をうかがえる北回りの東海道(のちの姫街道)を掌握していたことがうかがえる。

(4)近世

安土桃山時代後期、本能寺の変で織田信長が頓死し、豊臣秀吉が後継者として台頭した。徳川家康は遠江をはじめとする5か国を領有し、秀吉との抗争も経験しながら、本拠を駿河に移して浜松に城代(菅沼定政)を置いた。その後、秀吉が天下統一を果たすと、その家臣である堀尾吉晴が浜松城に入城し、天守や高石垣がある秀吉の城として一新した。秀吉没後、関ヶ原の合戦で天下は家康のものとなり大勢が決した。

江戸時代になると、浜松城は徳川譜代の城となり、大名たちによる整備に併せて城下町も大きく形成されていった。東海道は江戸と京都を結ぶ街道となり、宿場や一里塚、松並木が整備された。市内にあった浜松宿や舞坂宿は今切に設けられた関所を控えてにぎわった。人、物、情報の交流が一層盛んになり、国学などの学問や、「遠州大念仏」や「農村歌舞伎」などの民俗芸能の誕生と発展を後押しした。

①江戸幕府による支配

ア.浜松城下町の改造

天正10年(1582)、家康は、織田信長とともに甲斐に攻め込み、武田氏を滅ぼして駿河を手に入れた。しかし、同年本能寺の変で信長が倒れ、直後に豊臣秀吉が台頭したため、家康は、甲斐と信濃に軍を派遣し支配下に治め、既に領有していた三河、遠江、駿河を合わせた5か国の領国を得て本拠を駿府に移し、浜松に城代(菅沼定政)を置いた。

天正18年(1590)、豊臣秀吉が天下統一を果たすと家康は関東に移封され、浜松城には秀吉の家臣である堀尾吉晴が入り、天守を建設し現在見るような石垣を築造した。同時に家康の旧領には、駿府(静岡市)に中村一氏、掛川に山内一豊、久野(袋井市)に松下之綱ら秀吉の家臣が堀尾吉晴とともに配置されており、家康の所領だった時期から天下人・秀吉の支配地になった変化を城と城下町の一斉改造によって視覚的にも示したものと考えられている。浜松城跡から出土する瓦は掛川城や横須賀城と意匠が共通し、さらに秀吉が天正18年(1590)の小田原攻めのために建設した石垣山一夜城とも酷似することから、秀吉配下の工人が関わっていることが明らかとなっている。平成30年の浜松城跡天守曲輪の発掘調査では、瓦葺の大規模な構造物が存在したことが分かり、さらに天守が複合的な建物だったことが想像できるようになった。

秀吉の没後、慶長5年(1600)、関ヶ原の合戦で家康側が勝利すると、天下はほぼ家康のものになると定まった。家康に味方した秀吉恩顧の大名は、堀尾が出雲に、山内が土佐になど国持ち大名として石高は加増されたが、政権からは遠国に配置されることになった。浜松は徳川譜代の城となり、堀尾忠氏移封後の譜代大名たちにより三の丸が整備され、浜松城下町が整備されていった。堀尾の時代の天守(天守台)はその正面を東北東に向けており、当時の城下町の主要部は、前身の引間宿の系譜をひく場所(元目町、早馬町など)にあったと推定で

きる。江戸時代の東海道は城下東端の馬込川橋から三の丸の大手門まで一直線に新設されており、板屋町や新町といった町屋が道の両側に設けられた。現在の中心市街地につながる浜松の城下町、また宿場町は江戸時代のはじめころに完成したとみられる。

浜松城の天守は、現存する江戸時代の絵図には描かれたものがない。堀尾(豊臣)の天守は江戸時代の早い段階には失われていたようである。新設した東海道は、大手門を基点としており、江戸時代の新しい宿場のにぎわいから、天守台は視覚に入らない。



図1-4-17 青山家家中配列図(江戸時代、17世紀後半) 浜松市博物館所蔵、町名などを加筆。

武家屋敷は、元目町から早馬町(戦国時代までの引間宿)、高町、後道(現千歳町)に集約し、大手門以南の東海道沿いと、大手門から東に延びる新設された東海道沿いに町屋を配した。馬込川から田町までの東海道には両側に町屋が一行並ぶだけであった。古城(引間城)付近から下垂町、早馬町へ続く道路が、戦国時代以前の東海道と推定される。

イ.南部(平野部)の大名領と北部(山間部)の幕府領

慶長8年(1603)、家康が征夷大將軍となり江戸幕府を開くと、全国は、幕府が支配する「幕府領」(幕府領は、幕府の収入源である「幕領」と、將軍直属の家来の土地である「旗本領」に分けられる。)と、藩(大名)が支配する「大名領」、「寺社領」に分けられた。このとき、幕府は、江戸に近い関東地方と東海地方を重視し、それぞれの地に幕府領と親藩・譜代大名領を多数配置した。外様大名の多くは、江戸から離れた地方に領地があてがわれている。

なお、現在の浜松市域に位置する郡の領地別にみると、浜松藩領ばかりでなく幕領や旗本領、寺社領が入り組んでいたことが分かる。また、市域南部(東海道沿いの平野部)には浜松藩ほか大名領が多く、市域北部(森林資源の多い山間部)はほとんどが幕府領であった。

表1-4-4 遠江国領主分布一覧表(元禄期)(『元禄高帳』(元禄13年(1700))より)

郡名	村数	石高	大名領					幕府領				寺社領	
			浜松藩	掛川藩	横須賀藩	藤枝藩	三河吉田藩	幕領			旗本領 人 ^{※3}		
								代官 支配地	代官 支配地	代官 支配地			
敷智 ^{※1}	128	41,215	16,436					2,523		1,429	18,166	12	2,660
長上 ^{※1}	123	25,722	17,157					3,016			4,219	5	1,327
引佐 ^{※1}	41	12,769	1,983							1,493	略 ^{※2} (8,951)	5	342
麓玉 ^{※1}	5	1,400	109								1,264	2	25
浜名 ^{※1}	2	1,079						1,004			なし	0	74
周智 ^{※1}	92	23,108		8,515				1,261	2,219	1,489	略 ^{※2} (8,133)	7	1,491
磐田	1	1,042						771			なし	0	271
豊田 ^{※1}	253	50,462	10,833	879				11,727	2,272	4,412	略 ^{※2} (18,361)	18	1,978
山名	101	37,532	4,350	1,325	3,535			1,184	3,651	6,619	略 ^{※2} (15,788)	10	1,080
佐野(益)	94	26,770		19,414					6,629		略 ^{※2} (176)	1	551
城東(飼)	115	61,029		2,480	21,951	2,069	5,000		3,254		略 ^{※2} (25,615)	11	660
榛原	138	46,517		2,396		4,387		17,473	15,775		略 ^{※2} (5,323)	7	1,163
合計	1,093	328,651	50,876	35,015	25,487	6,456	5,000	38,961	33,802	15,446	83,287	36	11,639
12郡領主別石高割合			大名領 44.4%					幕領 26.8%			旗本領 25.3%	寺社領 3.5%	
現在の浜松市域の石高割合			大名領 41.6%					幕領 14.3%			旗本領 38.3%	寺社領 5.8%	

※1:現在の浜松市域に範囲の一部または全部が含まれる郡。(「長下」は資料に未掲載。)

※2:資料には「略」のみ掲載。()内は、本計画書作成時に、表中「石高」から旗本領以外の領地の石高を差し引いた数値を掲載。

※3:旗本の人数。

幕府は角倉了以に命じて天竜川を開削し、天竜川上流の直轄地である信州伊那と中流域、下流域の舟運による物流を拡大した。そのほとんどは木材で、上中流域の物産は船明・日明また二俣・鹿島(天竜区)を中継地として、河口の懸塚湊(現磐田市掛塚)から江戸・大坂へ運ばれた。伊那谷で加工された樽木(丸太を縦に蜜柑割りした木材)は、天竜川に流し、船明付近で集積させて、筏に組みなおして懸塚(現磐田市掛塚)へと運ばれた。

②街道と文化

ア.東西交通の要衝として発展した東海道と浜松宿

江戸を拠点とした徳川家康は、慶長6年(1601)、東海道に宿場を設置し、伝馬制度を整えた。設置された宿場には、伝馬や人足を備えた問屋場や、休泊施設としての本陣、脇本陣、旅籠が置かれた。なお、東海道が53次となるのは寛永元年(1624)のことである。

江戸時代の浜松は、江戸と京・大坂を結ぶ最重要幹線が通過し、両者の中間地点に位置することになった。さらに、橋のかかかっていなかった天竜川が東に、浜名湖今切が西にあり、いずれも天候などの事情で旅程が滞留する可能性があった。また、今切の対岸に荒井関所(現湖西市新居)が置かれ、大名の参勤交代や一般の旅人も関所を通過する前後で行程を整えることになった。これらの要因もあり、浜松宿には天保年間(1830-1843)に、本陣が6軒、旅籠が94軒あったとされる。6軒という本陣の数は東海道筋で最大で、小田原宿と浜松宿に限られる。小田原宿も箱根の関所を控えており、浜松宿と共通している。

最も古い本陣は、伝馬町の杉浦助右衛門家であると伝わり、当家の『御本陣日記』に、本陣として、正保4年(1647)に旅籠町の伊藤平左衛門家、旅籠町の杉浦惣兵衛家、伝馬町の梅屋市左衛門家の名が記載され、慶安3年(1650)に連尺町の佐藤与左衛門家の名が記載されている。その後、伝馬町の川口次郎兵衛家が現れて6軒となる。これは、寛永12年(1636)に参勤交代制が確立され、大名の往来が頻繁になったことによるものと考えられている。

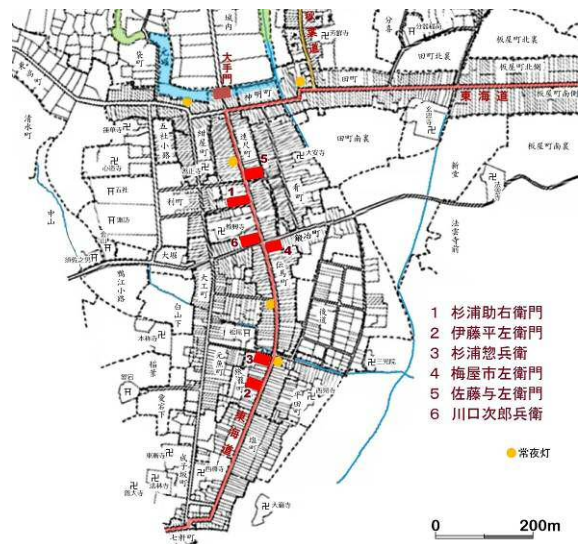


図1-4-18 本陣の位置

一方、旅籠に関しては、元禄16年(1703)には151軒あったとされる。同年の宿内総軒数が1,386軒との記録があるため、旅籠が全体の10.9%を占めていたことになる。この時期、旅籠が集中していたのは、伝馬町73軒、旅籠町22軒、田町22軒、塩町12軒、連尺町16軒の5町であった。

イ.東海道の脇往還として発展した姫街道

浜名湖の北岸を迂回する東海道の脇往還を姫街道という。姫街道は俗称であり、江戸時代には本坂通が公的な名称であった(本書では、以下「姫街道」という。なお「姫街道」という呼称は、中山道や下仁田街道にも使用されており、本街道に対する脇街道＝バイパスの意味かと思われる¹。「姫」という響きから、女性の通行が想像されるようになっていった。)

姫街道は江戸時代に初めて建設されたわけではなく、奈良時代に浜名湖南岸を通過する古

¹ 「ヒメ」は、例えば、アジサイ(紫陽花)に対するヒメアジサイ(姫紫陽花)、あるいはカブトムシ(甲虫)に対するヒメカブト(姫甲)のように、動植物等にも一般的な命名手法である。

代東海道とともに、浜名湖北岸を通過して遠江国府(現磐田市)と三河国府(現愛知県豊川市)を結ぶ北回りの東海道として整備された官道であった。浜名湖南部に今切が生じる以前も、浜名橋の崩落などの不安定さから北回りの東海道を利用することが多かった。家康は、南回りの東海道とともに北回りの東海道も復活させ、再整備をはかったのである。

姫街道は、江戸時代初めには、天竜川を越えた東海道が安間新田村で分岐して市野宿を経て三方原追分へ至り、気賀宿へ通じる道筋が公式とされ、市野宿の西と追分には一里塚も設置された。しかし次第に多くの旅人がにぎわう浜松宿を経由するようになり、浜松宿から三方原追分へ至り安間起点の道と合流して気賀宿へ向かう道筋を姫街道とするように変遷した。追分から気賀宿、三ヶ日宿を経て本坂峠を越えて隣国の三河国へ入る道筋は共通する。気賀宿には、南回りの東海道の荒井関所(今切関所)と対応するように、気賀関所が設置された。

姫街道には市野宿、気賀宿、三ヶ日宿、嵩山宿(愛知県豊橋市)が設けられた。市野宿には本陣が置かれ、気賀宿には本陣1軒、旅籠8軒、問屋場1か所が置かれ、三ヶ日宿には本陣1軒、旅籠4軒が置か

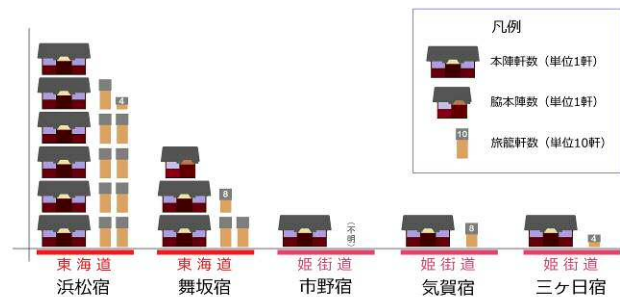


図1-4-19 浜松市内の宿場の規模

れている。なお、江戸時代中頃、浜松宿が発展したことにより姫街道の主要な道筋は浜松宿起点の道筋になり、市野宿は早くにさびれてしまった。



図1-4-20 東海道と姫街道(本坂通)

秋葉^{あきは}信仰の本山で火防^{ひぶせ}の神として知られる秋葉山は、江戸時代半ばから有名になった。秋葉山と鳳来寺山^{ほうらいじ}（愛知県新城市）をセットで回る旅が流行し、掛川宿から三倉^{みくら}を経由して秋葉山を参詣し、戸倉^{とくら}から熊を抜けて鳳来寺へ参詣し、御油宿へ向かうルートが選択された。このため、東海道を利用する旅人であっても浜松宿を通過しないことがあった。秋葉山の山頂には、秋葉寺と秋葉山大権現社及びその守り神である三尺坊^{さんじゃくぼう}があった。当時、火事の多かった江戸ばかりでなく、全国各地に秋葉詣^{あきはもうで}のための秋葉講が組織され、秋葉山へ参詣^{さんけい}する人が多くなった。掛川宿、浜松宿、御油宿^{ごゆしゆく}（愛知県豊川市）などからの秋葉道^{あきはみち}（秋葉街道）も整備され、道沿いには参詣者と自らの集落の安全を願って常夜灯が建てられた。

掛川宿からの秋葉道は、関東地方からの参詣者に利用され、掛川宿（掛川市）を起点として森、一ノ瀬^{こならやす}、小奈良安、犬居、坂下を通り、秋葉山へ向かう。この道は秋葉信仰の道となる以前から「塩の道」として、遠州と信州の物資輸送や文化交流の役割を担っていた。

浜松宿からの秋葉道は、浜松宿を起点として小松へと北上し、鹿島^{かじま}で天竜川を渡って二俣、光明山^{こうみょう}、和田ノ谷^{わだのや}、犬居を経て秋葉山へ向かう。中央区田町^{たまち}にはかつて青銅製の大鳥居（一の鳥居）があったが、第二次世界大戦中に供出対象となり解体撤去されている。文政5年（1822）に建てられた石製の二の鳥居は、現在も浜名区小松にあり、高さ 7.3 メートルと秋葉街道に残る最大の石造物である。

御油宿からの秋葉道は、御油宿（豊川市）を起点として豊川市、新城市を通り鳳来寺^{ほうらいじ}を参詣し、西川^{さいかわ}から戸倉を経由して秋葉山へ向かう。信州方面からは、飯田^{いわた}、八幡^{やわた}、越久保^{こいくぼ}、和田へと進み、青崩峠^{あおくずれ}を越えて水窪^{みさくぼ}、西渡^{にしど}を経て、下平山^{しもひらやま}から秋葉山へ向かう。

Ⅰ. 浜松宿の形成

家康入城のころの天竜川は鹿島付近で分流し「大天竜^{おお}」と「小天竜^こ」と表記される。「大天竜」は現在の天竜川に近い本流で、「小天竜」はさらに古い時代の天竜川の本流、現在でいう馬込川^{まごめがわ}にあたる。「小天竜」は江戸時代のはじめに中瀬^{なかぜ}（浜名区）付近で閉め切られ、浜松城下に沿う流れは急速に減少した。浜松城下は水害の危険が減衰し、旧河川敷や湿地帯の開発により城下町また宿場町を拡大できる可能性が広がった。

家康は岡崎城を嫡男・信康に預け、武田信玄と対抗する前線基地として引間城^{ひくま}に入り、これを浜松城として城域を大幅に拡大した。それでも元龜3年（1572）の三方ヶ原^{みかたがはら}の戦いでは、敗走した家康が引間城北門であった「元目口^{ひくま}」から浜松城に帰還しており、この段階ではもとの引間城も浜松城の主郭のひとつとして機能していたことがわかる。家康は信玄との危機を乗り越え、浜松での足掛け 17 年間で、天下のナンバー 2 と目されるまで出世しており、浜松城とその城下町も大幅に拡充された。かつて浜松城内にあった五社神社^{ごしか}や松尾神社を移転させ、「小天竜」沿いに形成されていた引間宿の商人たちを新たな城下町に移住させたと伝えられている。その後、秀吉家臣の堀尾吉晴による城と城下町の改造、次いで、天下人となった家康による東海道整備とともに、浜松宿はその街並みを一新したと思われる。

江戸時代の浜松宿は、本陣、旅籠の数が多き大宿場であった一方で、宝暦9年(1759)には、浜松宿全体で、^{れんじやくちよう}連尺町、^{てんまちよう}伝馬町、^{はたごまち}旅籠町、^{しおまち}塩町、^{たまち}田町、^{さかなまち}肴町、^{なるこごかまち}成子坂町、^{しちけんちよう}七軒町、^{かみしんまち}上新町、^{しんめいちよう}神明町、^{いたやまち}板屋町、^{しんまち}新町、^{はやうちよう}早馬町、^{しもだれまち}下垂町、^{いけまち}池町、^{かじまち}鍛冶町、^{なめだちよう}平田町、^{もとうおちよう}本魚町、^{だいくまち}大工町、^{とぎまち}利町、^{こうやまち}紺屋町、^{なごりちよう}名残町、^{しみずちよう}清水町、^{ざるやちよう}猿屋町の24町となっていた。とりわけ職人町には、例えば^{しおまち}塩町のように、家康の命によって引間城の^{ひくま}塩市口から現在地に移転したとするなど、^{しおいちぐち}引間宿ゆかりの地から新たな浜松城下への移設が実施されたとのいわれを残す町が多い。

また、肴町は、家康の関東移封後に豊臣秀吉の命で浜松城主となった堀尾吉晴によって本魚町から移動したという記録を残す。家康と吉晴、また江戸時代初期の譜代大名らによって、現在の城下町と三の丸大手門を基準とする東海道が新設されたものと思われる。

24町の外に侍屋敷として、^{ごじょうない}御城内、^{うまびやし}馬冷、^{さくざ}作左、^{ふくろまち}袋町、^{たかまち}高町、^{あきはまち}秋葉町、^{はんこうまち}半頭町、^{かもえこうじ}鴨江小路、^{はくさんした}白山下、^{あたごした}愛宕下、^{ぶんぎ}分器、^{ふなぐら}船蔵、^{げんもく}元目、^{ねんぎようじ}年行事、^{しもば}下馬場、^{ひやくけん}百軒、^{はやうま}早馬、^{うしろみち}後道、^{おくみ}御組があり、800ほどの戸数があった。なお、町人は、本町人と平町人の二階層に分かれており、本町人は、本役と称し、直接町政に参与する義務と権利を持っていた。一方、平町人は借家人、借地人、店借人などである。無役町は職人町が主で、大工、木挽、畳師、瓦師、檜物師、^{こびき}塗師、^{ひものし}桶師、^{ぬりし}塗師、^{おけし}桶師、^{かじや}鍛冶屋、^{こうや}紺屋、屋根屋の職人は、城主から特別の保護を受け、^{しよやく}諸役¹、^{じし}地子²の免除の特権を与えられ、公役を外されていた。

オ.学問(国学)の発展

浜松藩では、元禄から^{きようほう}享保(17世紀後半から18世紀)に新しい学問や思想が現れた。そのなかに、日本の古典を研究し、日本人固有の精神を明らかにしようとした国学があり、^{けいちゆう}契沖に始まり、^{かだのあずまろ}荷田春満や^{かものまぶち}賀茂真淵を経て、^{もとおりのりなが}本居宣長により大成された。

賀茂真淵は、元禄10年(1697)、遠江伊場村(中央区東伊場)の^{いば}賀茂神社の^{ひがしいば}神官岡部家に生まれ、浜松宿本陣梅谷の養子となり、享保18年(1733)、上京して荷田春満に国学を学んだ。とりわけ、『万葉集』の研究を通じて古代人の考えを解明しようとし、その注釈書として『^{まんようこう}万葉考』を著している。そのほかに『^{のりとうこう}祝詞考』、『^{こくいこう}国意考』などがある。

真淵の弟子としては本居宣長が有名であるが、浜松周辺には、『^{「とおとうみのくにふどきでん}遠江国風土記伝』を著した^{うちやままたつ}内山真龍がいる。真龍の弟子には有玉村(中央区)の^{ありたまむら}高林方朗^{たかばやしみちあきら}がおり、浜松藩主水野忠邦の^{みずのただくに}援助を受けて浜松における国学の発展に寄与した。なお、現在、賀茂真淵記念館が中央区東伊場、^{いば}内山真龍資料館が^{おおや}天竜区大谷にある。

¹ 各支配者が被支配者に賦課した労働課役のこと。特に、浜松宿24町では、以下に示す「馬込橋番」をはじめ、4つの夫役があった。

- ・馬込橋役：馬込橋の架け替えや修復にあたる役割。
- ・高札番：出火のとき高札を取り外す役割。高札(立札)とは庶民のあいだに法令を徹底させるために設けたもの。浜松では連尺町大手筋に一か所あり、天保年間には親子兄弟夫婦は親しくし家業を励めという道徳を示したものをはじめ、切支丹禁制、火付禁止、にせ金使用禁止、徒党を結ぶことの禁止の五種類が掲示されていた。
- ・火消番：城内や町家が火災の際、消火にあたる役割。
- ・茶壺助役：幕府が將軍御用の宇治茶を茶壺に入れて江戸まで運ぶ茶壺道中を、人足を出して補助する役割。

² 日本の古代・中世から近世にかけて、領主が田地・畠地・山林・塩田・屋敷地などへ賦課した地代のこと。

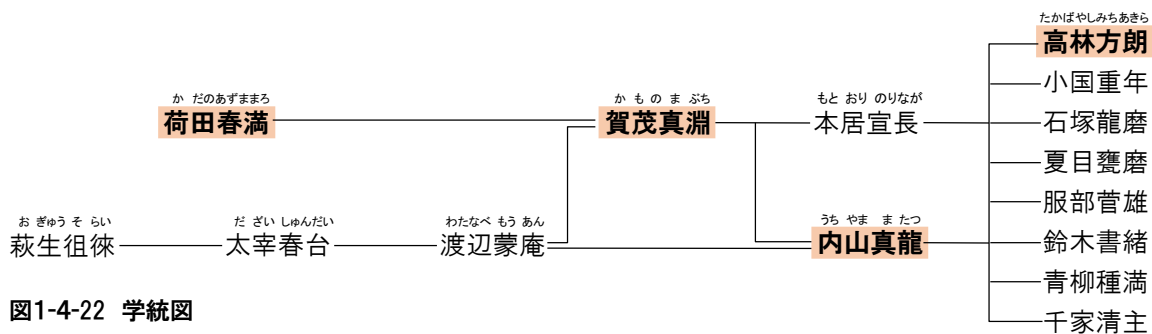


図1-4-22 学統図

カ.黄檗宗寺院の広がり

市域南部では、江戸時代初めに中国からもたらされた新たな禅宗(黄檗宗)寺院が教線を広げたことが特筆される。承応3年(1654)、中国僧の隠元が弟子の独湛らをともなって渡日した。隠元らは、江戸時代の宗門人別制度のなかで硬直しつつあった日本の仏教界に新たな刺激を与え、また書画や詩文にも優れていた。寛文元年(1661)、隠元や独湛は京都の宇治に黄檗宗の本山となる黄檗山萬福寺を建立している。

独湛の教えに帰依した人物が、旗本で金指(浜名区引佐町)近藤家の近藤貞用であった。貞用は、独湛を招き、寛文4年(1664)に当地域で最初の黄檗宗寺院となる初山宝林寺¹(浜名区細江町)を建立している。さらに独湛を勧請開山として、その弟子の石窓(窓)が延宝6年(1676)に大雄庵(中央区天神町、現大雄寺)を創建するなど市内に同宗の寺院を広げた。石窓は天神町の出身だという。また、平口(浜名区)の不動寺など、他宗派の寺院を改宗・再興するなどして当地における黄檗宗寺院が増加することとなった。白華寺(中央区上島七丁目)は、明治維新後に、五日市場(浜名区細江町)から光福院跡地(現在地)に移転している。泉涌寺(京都府)出身の法源は諸師を経て独湛に師事し、宝永元年(1704)には宝林寺の住職となった。近藤家から舟岡山(中央区半田町)の領地を寄進され、正徳3年(1713)には大智寺(廃寺)を創設している。舟岡山は削平されたが、南端に法源禅師の髪爪塔が残されている。

独湛は、18年間を浜松で過ごし、のちに京都に戻って本山・萬福寺の第4代住職に就いた。江戸時代以前に広まっていたほかの諸宗が長く日本風の仏教になじんだところに、黄檗宗は中国風の所業や文物を展開し、当時の人びとに革新的なものと認識されていった。



図 1-4-23 初山宝林寺



図 1-4-24 大智寺跡(法源禅師髪爪塔)

¹ 重要文化財の指定名称を表記する場合は寶林寺と記載しているが、一般の寺院名称として表記する場合は地元で使われている宝林寺と記載する。

(5)近代

廃藩置県により、浜松は浜松県などを経て、伊豆・駿河・遠江国を合わせた静岡県の一部となった。駿河と遠江は大政奉還した15代将軍・徳川慶喜と旧幕臣の領地としてあてがわれ、浜松にも幕府ゆかりの人物が配属されたり、幕臣たちが入植したりするところとなった。慶喜が住んだ駿府は「静岡」と改称し、これが新たな県の名前となっている。

弘化4年(1800)の下石田報徳社の結成をはじめとして、浜松は二宮尊徳に傾倒した報徳運動の拠点となり、金原明善の治山治水事業もその実践例の一例である。報徳による質素儉約と無利息融資は、浜松にて楽器や形染など新たな産業の勃興に繋がっている。

明治44年(1911)7月、浜松町は市制施行し、人口36,782人の浜松市が誕生した。

その後、静岡県下最大の工業都市として発展していくが、昭和16年(1941)12月8日、日本のハワイ真珠湾攻撃により太平洋戦争が始まった。戦況は次第に悪化し、浜松市では「浜松大空襲」と呼ばれる昭和20年(1945)6月18日に受けた焼夷弾の波状攻撃により市街地は焦土と化した。全半焼・全半壊した住宅3万戸、死者はおおよそ3,000人に上った。

①明治期

ア.浜松県の成立と廃止

大政奉還によって将軍職を辞し、江戸開城後、戊辰戦争に敗北した徳川宗家に対し、明治政府は明治元年(1868)、駿河・遠江ほか70万石の領主とする処分を行った。これにより、浜松藩の井上家をはじめ、駿遠のほとんどの旧領主は関東へ転封となった。浜名湖東岸の堀江(中央区館山寺町)に陣屋を構えていた旗本大澤家は所領を安堵され、小規模ながら堀江藩となり、徳川宗家による新たな駿河府中藩(翌年、静岡藩と改名)と一時並立した。

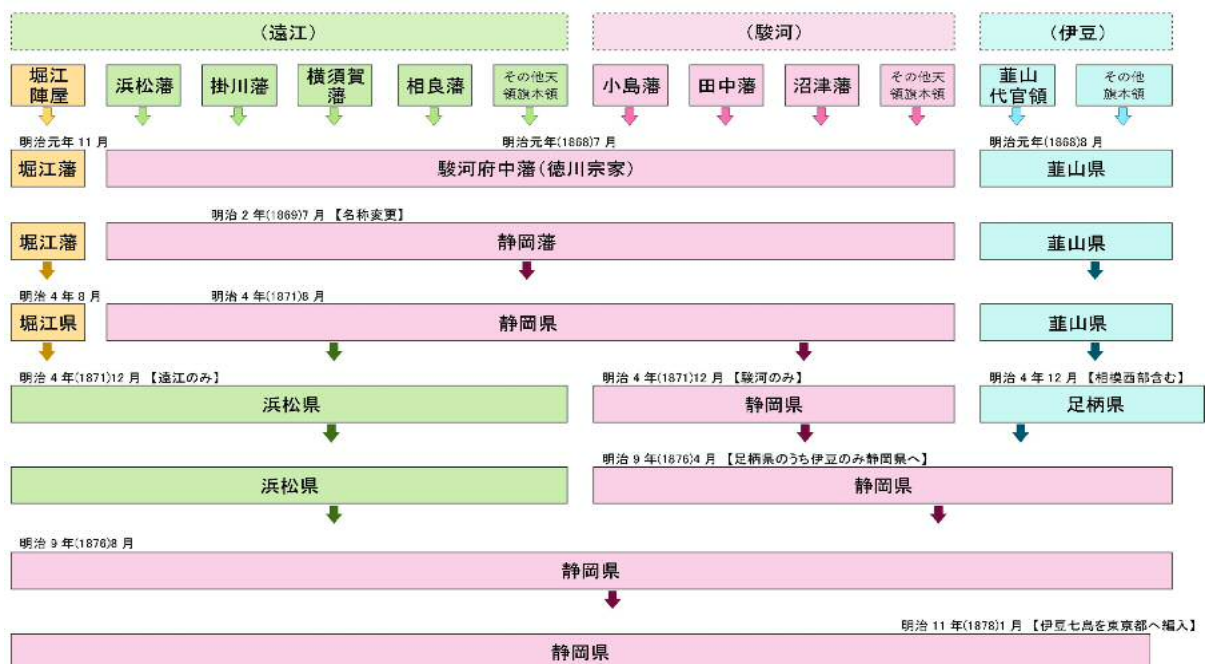


図1-4-25 藩から県へ 静岡県の成立と変遷

明治4年(1871)7月、明治政府による^{はいはんちけん}廃藩置県により、それぞれ静岡県と堀江県となるが、堀江県はすぐ廃止とされた。その年のうちに、旧遠江に浜松県、旧駿河に静岡県が分置されている。しかし、明治11年(1878)1月には、浜松・静岡両県とともに旧伊豆国のうち伊豆半島のみを合わせた新たな静岡県が成立して現在に至っている。

当初の廃藩置県には試行錯誤がみられ、作為が介入する余地があった。県の管轄下の行政区は大区小区制を経て、郡・町村となり、行政村の母体は江戸時代までの村が当てられた。藩の中心だった城内の権力は空白となったが、江戸時代の村の姿は維持されることになった。行政村は人口規模などが同等になるように編成された。人工規模の大きな都市は、町制、さらに市制が施行され、静岡県西部では浜松市が初めて市制を施行した。

大区小区制の一時期を除き、郡の名前は、江戸時代までと同様、奈良時代に遡る「国・郡・里」制を踏襲したことになった。行政村の名前には、伊佐見(伊^い左^さ見^み)、伊^い左^さ地^ち、佐^さ浜^{はま}、大人^{おおひとみ}見^{こひとみ}の各村)や神久呂(神^かケ^く谷^く、大^お久^く保^ぼ、志^し都^と呂^ろの各村)、小^こ野^の田^だ村(小^こまつ^{まつ}・内^{うち}野^の・半^{はん}田^だの各村)のように、元の村から一文字ずつ採ったところ、積^{せき}志^し村のように全く新しい命名をしたところなどがある。

浜松町は明治44年(1911)に要件を満たして市制を施行した。町役場は当初紺屋町、次いで^{とぎまち}利町に置かれ、江戸時代までの城下町の中枢からはやや南に離れた場所にあった。^{ごしや}五社神社と諏訪神社に近く、鴨江寺への参詣道にも接していた。市制施行以後も、この周辺は市の中核と目されていた。昭和2年(1927)の市公会堂や昭和3年(1928)の浜松警察署、昭和5年



図1-4-26 浜松町から浜松市へ(1911年)

裏面に「茲時明治四十四年六月三十日、町制ヲ送り市制ヲ迎フルニ方リ吏員撮影。以テ記念スルモノ也」と墨書してある。

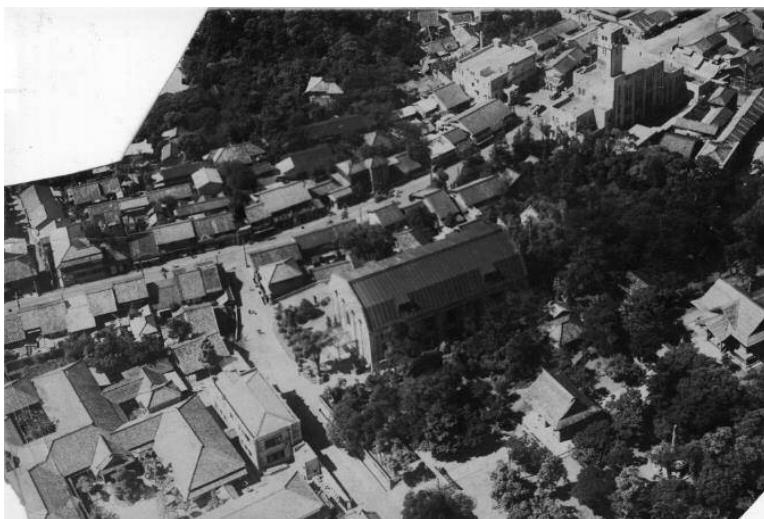


図1-4-27 昭和初期の浜松利町付近航空写真

(写真左上欠損) 画面左下が当時の浜松市役所、中央に公会堂。右下には戦災で焼失した諏訪神社が見える。画面右上には望楼がある浜松警察署、鴨江小路を挟んだ南側(画面上)には銀行協会が写っている。

(1930)の浜松銀行集会所(のちに銀行協会)などの公共建築が次々に完成している。

イ.三方原の開拓(百里園含む)

明治2年(1869)、明治政府のもと近代国家建設に向けて、気賀の商人であった気賀林^{き が りん}により三方原^{み か た は ら}の開拓が行われた。明治維新により職を失った士族の生活を支えるため、士族とともに茶園を整備する開墾を行った。しかし、三方原^{み か た は ら}の土地は赤土でやせており、水の便も悪く、ススキなども多数茂っていたため容易ではなかった。加えて農耕に慣れていない士族が多く、途中で逃げ出す者も現れた。

明治4年(1871)、浜松県になると、県令^{けんれい}の林厚徳^{はやしあつり}の援助を受けて茶の栽培が進み、百里園^{ひやくりえん}が開かれた。百里園は、気賀林が初代園長を務め、次いで内野村^{うちの}(浜名区)の横田保^{よこた たもつ}が二代目園長となり、茶樹の植え付けや栽培に加えて製茶場を整備するなど事業の拡大を図るも、横田の死後、明治39年(1906)には閉園した。

ウ.天竜川の治水

慶応4年(1868)5月に起こった天竜川の大洪水による浜松宿の甚大な被害を目の当たりにした安間村^{あんま}(中央区安間町)の金原明善^{きんばらめいぜん}は、明治政府に天竜川改修工事を誓願し、その任務を命ぜられた。明治5年(1872)10月に浜松県から天竜川御普請専務^{てんりゅうがわごふしんせんむ}、明治6年(1873)2月には天竜川通総取締役に任命されている。明善は、明治7年(1874)6月に設立した天竜川通堤防会社^{ていぼうかいしや}(のちに治河協力社^{ちかきょうりょくしや}に改称)で、下流平野北端の二俣(天竜区)から南端の河口にあたる掛塚^{かけつか}(磐田市)までの両岸に総延長約36キロメートルの堤防を25年間の継続事業で完成させる計画を立てるも、費用の工面が思うように進まなかったため、自らの田畑や家財を国に献納することを引き換えに、政府から補助金を受けて事業を開始した。しかし、明治14年(1881)に始まった政府の財政整理の余波を受け、補助金給付は廃止された。また治河協力社への参加をめぐる沿岸諸村代表らとの調整が上手くいかず、明治18年(1885)に治河協力社は解散となった。明治32年(1899)に政府直轄によって天竜川河川工事が行われ、また大正12年(1923)には第2次改修工事も行われて、明善の30年以上に及ぶ悲願は達成された。

明善は、下流の堤防建設だけでなく、中流域の水源涵養林の育成が治水事業として重要だととらえていた。このため瀬尻^{せじり}(天竜区龍山町)の御料林の貸与に始まり、荒廃していた付近の民有林も買い入れて、数百万本のスギ・ヒノキを植林し、人工林への転換をはかった。また切り出した材木を輸送する会社を設立し、加工した製材の販路を拡大するなど、植林・輸送・製材販売までを一体として、北遠地域における林業の産業化に貢献した。

現在も市域北部を中心とする天竜川中流域には「天竜美林」が広がっている。ちなみに、傾斜のきつい山林の下草^{かが}を屈むことなく刈り取ることができるように、明善が考案した柄の長い「金原鎌^{きんばらがま}」は、全国の植林地に普及した。

¹ 明治4年(1871)から明治19年(1886)まで置かれた県の長官。

工. 鉄道の開通

明治政府は主要都市間を結ぶ鉄道の建設をすすめた。明治3年(1870)には、新橋(現東京都港区)と横浜(神奈川県)の間で建設工事に着工し、同5年(1872)にはこの区間で日本初の鉄道が開通した。大阪から神戸(兵庫県)の間も、同3年に着手し、鉄橋工事などを経て同7年(1874)には開通している。東西(京浜と京阪神)を結ぶ幹線鉄道としては、当初中山道に沿った経路が検討され、東海道沿いではなかった。しかしながら、山岳地帯を経由することでトンネルなどの工事費がかかること、急こう配の回避、また想定される所要時間が、東海道沿いのほうが短かったことなどから、政府は明治19年(1886)に中山道経由の計画を廃し、東海道経由に変更することを決定した。また、開通の目標年度を第1回帝国議会が開催される明治23年(1890)とした。

まず、明治21年(1888)年9月には浜松～大府(愛知県)が開通し、それ以前に開通していた大府以西と合わせて、浜松～長浜(滋賀県)間が鉄道で結ばれた。ついで、同22年(1889)年2月に国府津(神奈川県)～静岡間が開通し、国府津以東と合わせて東京から静岡までが結ばれたことになる。なお国府津から沼津までは、現在の御殿場線経由である。さらに同年(1889)4月、天竜川鉄橋の完成によって、静岡～浜松間が開通した。滋賀県内の工事が完成して新橋～神戸間が全線開通したのは明治22年(1889)7月であり、計画決定から2年余りで完成させたことになる。市内の駅(停車場)の開業は、浜松駅と馬郡駅(現舞阪駅)が明治21年(1888)年9月(この時点では浜松駅は名古屋・京都方面のみ発着)、天竜川駅は天竜川の材木を中心とする貨物取扱所として同25年(1892)に開設し、同31年(1898)に停車場に昇格した。弁天島駅は同39年(1906)に夏季のみの仮駅として開業、大正5年(1916)に常設となった。高塚駅は昭和4年(1929)である。東海道線の開業は、旅客の行き来ももちろんであるが、大量の貨物輸送を実現し、織物や木材など、産業都市としての浜松を発展させた。



図1-4-28 東海道鉄道(後の東海道本線)の建設

オ.産業の発展

工業都市浜松の現在を支える産業基盤が確立したのは明治期である。このころの主な産業は、金融業、製糸・織物工業、染色業、楽器製造業などで、氷砂糖製造など特色あるものもあった。帽子製造業や紡績工場、鉄道院浜松工場なども誘致された。

a.金融業

江戸時代から木綿を中心とした商品作物が奨励され農村でも経済が発達していた遠州地方では、金融機関も早くから開設された。明治6年(1873)、き が はんじゅうろう ひらの またじゅうろう きんばらめい 気賀半十郎、平野又十郎、金原明善ぜんらの有力資産家が御用掛に任命され、県の資金で資産貸付所が運営された。

明治8年(1875)には民営化され、非営利的な側面を持っていた資産貸付所も明治22年(1889)には普通銀行業務に移行し、大正9年(1920)西遠銀行せいえんと合併して遠州銀行となった。

また、明治10年(1877)、国立銀行条例に基づいて全国に設立された153の国立銀行のうち、第二十八国立銀行(現在の静岡銀行)や第百三十八銀行が浜松市内に設立されている。

その後、多数の銀行が設立されるも合併などを繰り返し、明治末の時点で浜松市内に本店を置く銀行は30行を超えていた。しかし、大正期の経済変動から太平洋戦争の緊迫化にしたがって、当時市内にあった銀行は静岡市に本店を置く静岡銀行と合併(廃業した銀行を除く)し、市内に本店を置く銀行はなくなってしまった。

b.織物工業

手工業による地方取引にとどまっていた織物生産は、幕末から明治にかけて、天竜川下流の扇状地を中心としたきぎょうち機業地が成立し、取引圏も拡大して「遠州縞」へと発展した。

織物工業の発展を支えたものに紡織機や織機の発達が挙げられる。紡織機では、明治12年(1879)ごろから笠井方面で使用された「ガラぼう紡」、織機では、明治20年(1887)ごろに導入された「ボタン機(チャンカラ機)」や明治26年(1893)ごろに導入された「松田式足踏機」などが、織物の生産量を飛躍的に増加させた。

表1-4-5 浜松市内に本店を置いていた銀行(明治末)(抜粋)

銀行名	銀行名
朝日銀行	積志銀行
阿多古銀行	天竜川銀行
伊平銀行	遠江銀行
市野銀行	中瀬銀行
浦川銀行	中野町銀行
笠井銀行	西川銀行
金指銀行	浜名銀行
気賀銀行	浜松銀行
熊村銀行	浜松貯蓄銀行
倉松銀行	曳馬銀行
気多銀行	百三十八銀行
光明銀行	芳川銀行
浜松資産銀行	宮口銀行
鎮玉銀行	都田銀行
下平山銀行	横山銀行
西遠銀行	竜禅寺銀行



図1-4-29 足踏織機

大正期には、第一次世界大戦を契機として国内だけでなく海外市場へ積極的に進出し、織物工場が増加した。国内向けの小幅織物から海外向けの広幅織物への転換が急務となった。綿糸の需要も増大したため紡績工場の誘致もはかられた。大正 6 年(1917)の東洋紡績(中央区東伊場一丁目)、大正 15 年(1926)の日清紡績(浜名区貴布祢)など市郊外の田園地帯に大規模な工場が建設された。



図1-4-30 東洋紡績浜松工場

c. 染色業

織物業の発展は、一方で織機の大形機械化をすすめ、他方では染色業の機械工業化をけん引した。日本の染物は明治中期まで正藍染しょうあいぞめが主であったが、ドイツなどから化学染料が輸入されるようになると、浜松でもそれらを用いる者が現れた。その後、明治 39 年(1906)に静岡県工業試験場染色部が天神町村馬込てんじんまちむら まごめ(中央区)に設立され、遠江織物同業組合とともに研究指導にあたり、明治 40 年(1907)に西遠染色株式会社せいえんが馬込川まごめがわの豊富な水の利用もあって馬込河畔に設立され、本格的な化学染色の時代を迎えるに至った。

明治 33 年(1900)、織物に柄模様を形付けする製形機がらもようの製造などを行う木綿中形株式会社もめんちゅうがたが元城町もとしろちょう(中央区)に設立された。この染色機かためんがたのりつけき(片面形糊付機)は、それまで染物の形付けが手作業で行われていたものを機械化するものであり、「染色業界の革命」とまで呼ばれるほど画期的なものだった。会社は船越町ふなこしちょう(中央区)への移転とともに日本形染株式会社にほんけいせんと改名した。

d. 帽子製造業

明治中期になると、洋装の広まりとともに、帽子の需要も増加した。このため、浜松の有力資産家や財界人などが支援し、東京の帽子製造会社を浜松に誘致して、明治 29 年(1896)、帝国制帽株式会社ていこくせいぼうが設立された。

フェルト帽を中心に、生産額も増し、高級ソフト帽、中折れ帽は国内だけでなく、中国を始め諸外国に輸出するまでに成長した。しかし、昭和 20 年(1945)の戦災で焼失し、向宿町むこうじゆく(中央区)に移転するとともに社名を帝帽(現在はテイボー)に改名し、培った帽子製造技術を生かしたヘルメット製造や、フェルト製造技術を生かしたサインペンのペン先製造に転換した。



図1-4-31 帝国制帽株式会社

e. 楽器製造業

医療機器の製造、販売を行っていた和歌山県出身の山葉寅楠やまは とらくすが、浜松小学校のオルガンを

修理したことが、本市における楽器製造の出発点となった。

山葉寅楠は、明治23年(1890)に板屋町^{いたやまち}に工場を移転し、明治24年(1891)には社名を山葉楽器製作所と改めている。明治25年(1892)にオルガンの輸出を行い、明治30年(1897)に日本楽器製造株式会社(現ヤマハ)へと発展させ、河合小市^{かわいこいち}の協力を得て、明治33年(1900)初の国産ピアノを完成させた。昭和2年(1927)、河合小市は河合楽器を設立して独立した。

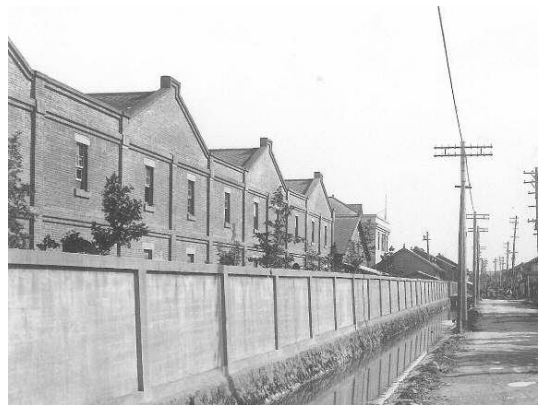


図1-4-32 日本楽器製造株式会社

②大正期・昭和期(戦前)

ア.新しい交通(軽便鉄道と自動車)の誕生

明治39年(1906)に鉄道国有法が公布されたが、全国の主要鉄道網以外の各地域を結ぶ私鉄の建設計画はさかんに提案され、そのうちのいくつかが実現している。

浜松市域では、多くが軌道の幅が狭く車両の容積が一回り小さいために敷設費用が軽減できる軽便鉄道である。明治43年(1910)には軽便鉄道法が施行され、その建設が促されている。明治42年(1909)には、浜松・中ノ町間^{なかのまち}、浜松・鹿島間^{かじま}に軽便鉄道が開通した。また、明治43年(1910)には、中ノ町線と鹿島線が板屋町^{いたやまち}で結ばれた。さらに大正3年(1914)には、鹿島線の西ヶ崎と笠井^{いたやまち}を結ぶ笠井線^{もとしろ}や元城・金指間^{かなさし}を結ぶ浜松軽便鉄道も開通した。大正12年(1923)には、遠州軌道株式会社が買収した鹿島線を全線改軌・電化し、輸送力を大幅に増大させた。また同年、浜松鉄道(旧浜松軽便鉄道)は、奥山^{おくやま}まで路線を延長した。



図1-4-33 遠州電氣鉄道案内(大正9年)

大正9年(1920)にはタクシー営業、大正12年(1923)にはバス事業が始まり、次第にその路線も増え、昭和初期にはバス事業者の合併などが進み、浜松の自動車交通網が整っていった。

こうした乗合自動車の普及により、鉄道(軽便鉄道)は次第に衰退していくことになる。



図1-4-34 浜松軽便鉄道

イ.戦時体制下の浜松

大正年間、都市化が進行する中でも、井戸水の取水にたよってきた浜松市は、大正13年(1924)に異常渇水を経験し、上水道整備の必要性が高まった。昭和6年(1931)には住吉浄水場が完工し、現市中心部への通水が始まった。三方原^{みかたはら}台地上では、大正15年(1926)に飛行第七連隊、昭和3年(1928)には歩兵第六十七連隊の跡地(軍縮で統合)に高射砲第一連隊が、昭和8年(1933)には浜松陸軍飛行学校が設置され、軍都の様相を呈するようになった。

昭和12年(1937)に日中戦争が始まり、翌年には国家総動員法が制定されると、浜松市も急速に戦時体制下に組み込まれた。原材料が不足し、また輸出が途絶えた繊維産業は衰退し、農林水産業も含め生産者・労働者の多くが兵士や軍需工場に動員されるようになった。繊維や楽器などの工場の多くが、航空機のプロペラなどの生産に転換された。昭和16年(1941)12月8日、日本のハワイ真珠湾攻撃により太平洋戦争が始まり、昭和18年(1943)を境に戦況は悪化し始めた。戦争の激化により労働力不足が顕著になると、中等学校以上の学徒は軍需工場などへ動員された。

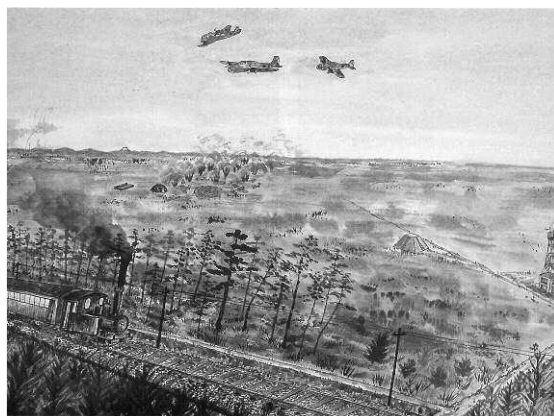


図1-4-35 三方原爆撃場の記憶を描いた絵画

ウ.空襲の激化と浜松大空襲

浜松市は、昭和19年(1944)12月に初めて米軍機による攻撃を受け、以後、艦砲射撃を含めて27回にわたり空襲を受けた。なかでも「浜松大空襲」と呼ばれる昭和20年(1945)6月18日の空襲は、深夜から明け方まで果てることも知らぬ焼夷弾の波状攻撃を受けて、市街地は壊滅状態となった。被害は、全半焼・全半壊した住宅3万戸、罹災者は当時の人口の64%にあたる12万人、死者はおおよそ3,000人に上った。また、この戦争で地域に伝わった多くの文化財も焼失など被災した。空襲の激化を受けて、市街地の市民が親戚などを頼り、市域北部の山間地をはじめ他県などの集落への疎開が行われた。

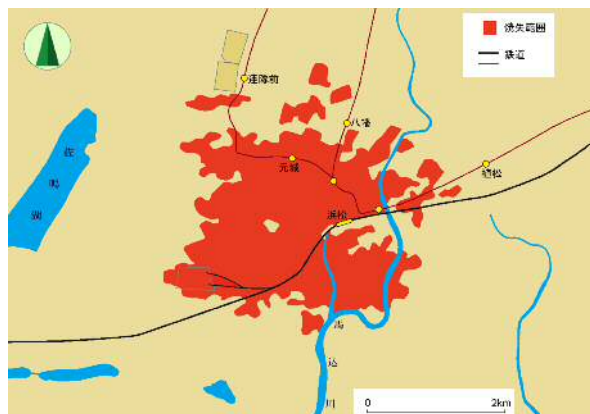


図1-4-36 焼け野原となった浜松市街

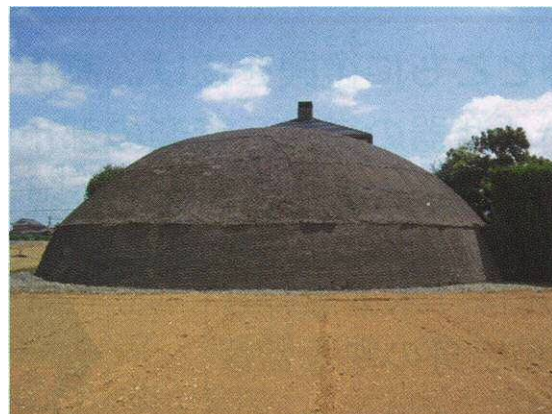


図1-4-37 三方原に現存する飛行機用格納庫

(6)現代

戦後、浜松は、焦土と化した市街地の復興を行うべく、街路や公園緑地計画などの都市計画事業を開始した。また、昭和 28 年(1953)の町村合併促進法を受けて近隣町村との合併を積極的に実施していった。戦後の深刻な食糧難を打開するため、三方原^{みかたはら}の開拓を進めるとともに、明治より課題であった水の確保を図るため、秋葉ダム^{あきは}より導水する三方原用水の整備を進め、昭和 42 年(1967)に通水式が行われた。これにより、広大な三方原の大地を潤すこととなり、当地の農業の発展を大きく後押しすることとなった。平成になってからは、平成 17 年(2005)7月に浜松市を含む 12 市町村の大合併が行われ、面積 1,558.06 平方キロメートル、人口 808,132 人の新しい浜松市が誕生し、その後の平成 19 年(2007)4月には政令指定都市に移行した。

①昭和期(戦後)

ア.戦災復興と町村合併

戦災に対する復興は、敗戦の年の昭和 20 年(1945)11 月に市議会に復興委員会を常設したことをはじめに、街路や公園緑地計画などの都市計画事業として開始された。戦前の浜松には公園施設が少なかったため、復興計画のなかに公園配置計画が盛り込まれ、浜松城公園、和地山公園^{わぢやま}、四ツ池公園など、25 の公園が計画され整備が進められた。

政府は町村合併促進法を昭和 28 年(1953)に制定し、市町村の合併推進による行政能率の向上を目指した。浜松では、それより以前の昭和 24 年(1949)4月に浜名郡可美村^{かみ}の一部、同年 8 月に入野村^{いりの}の一部、昭和 26 年(1951)3月に浜名郡新津村^{しんづ}、五島村^{ごとう}、河輪村^{かわわ}を合併し、法施行後の昭和 40 年(1965)7月には浜名郡庄内村^{しょうない}を合併して、旧浜松市(面積 250.66 平方キロメートル)を成立させた。(可美村の全域は、平成 3 年(1991)5月 1 日合併。)

イ.工業の隆盛

浜松の産業を支えてきた繊維工業、機械工業、楽器工業も戦災で壊滅的な被害を受けたが、昭和 25 年(1950)に起きた朝鮮戦争に伴う特需景気も関係して、急速に復興が進んだ。オートバイ、織物、楽器の各工業の発展は目覚ましく、これらは浜松の三大産業と呼ばれるようになった。市内では大手の大規模工場が設置される一方で、いわゆる町工場も各地で操業した。産業の底辺を支えるだけでなく、独自の技術で個性的な製品が生み出された。現在もノコギリ屋根の中小工場を市域の随所でみることができる。

オートバイ生産は、光明村^{こうみょう}(天竜区山東)出身の本田宗一郎^{ほんだそういちろう}のアイデアから生まれた原動機付き自転車の製作が契機となり、昭和 25 年(1950)から昭和 28 年(1953)にかけて、市内の鉄工各社が一斉に小型エンジンの開発やオートバイの試作を競うようになった。オートバイメーカーは乱立し、一時は 40 社に達したが、次第に淘汰されて、大手 3 社が生き残った。

ウ.三方原の開拓と用水事業

戦後の深刻な食糧難の打開と、町にあふれている失業者や戦地からの復員軍人、また大陸からの引揚者や戦災者などを救済するため、三方原地区と今の高丘地区などの約1,460ヘクタールを対象に開拓が計画された。現在でも規則的に並ぶ居住地や直線的に区画された農地に、当時の開拓集落の景観を残した地域がある。

初めは、麦、ジャガイモ、サツマイモなどの主食中心の農業が営まれたが、昭和30年(1955)ごろからは、落花生、大根、スイカなどの換金作物へと変わった。また、その後は、牛、豚、鶏の飼育、果樹や花などの園芸作物栽培へと移ってきた。

しかし、天竜川河口に形成された扇状地が隆起してできた三方原台地は、昔から痩せた赤土(酸化鉄で強い酸性を有する)で耕作には不向きな土地であった。

これを解消するため、昭和37年(1962)、秋葉ダム右岸上流部から取水する三方原用水の整備に着手し、およそ5年7か月かけ、昭和42年(1967)に通水式、翌43年(1968)から農業用水の通水を開始した。これにより、明治期から開墾されてきた広大な三方原の台地を潤すこととなり、当地の農業の発展につながった。

エ.佐久間ダムの建設

戦後、電力供給がひっ迫していた日本では、水力発電所の開発が急務だった。ダム建設による電力の増産を目指し、天竜川に佐久間ダム(天竜区佐久間町と愛知県豊根村の間)が建設された。昭和28年(1953)の着工から、わずか3年4か月という驚異的なスピードで完成し、工場への電力を供給した。佐久間ダムの完成は、中部地方での電力供給を安定化させ、工場だけでなく家庭の電化を後押しした。さらに、高さ100メートルを超える鉄筋コンクリート建築物を造る技術が確立し、その後の都市部をはじめとする超高層ビル開発に活かされたと言われる。

オ.都市計画の変遷

昭和19年(1944)から翌年にかけて、浜松市街地は連合国による空襲と艦砲射撃でほぼ壊滅した。戦後の復興にあたって、昭和22年(1947)の復興都市計画により、市の中心は再び浜松城内に移ることになった。昭和25年(1950)には元城もとしろプールを建設、市制40周年を記念した



図1-4-38 都田町白昭の街区

昭和22年(1947)、旧満州からの引揚者らによって三方原の開拓が進められた集落のひとつ。住宅は更新されたが、南北に貫く道路に十数軒がならぶ。

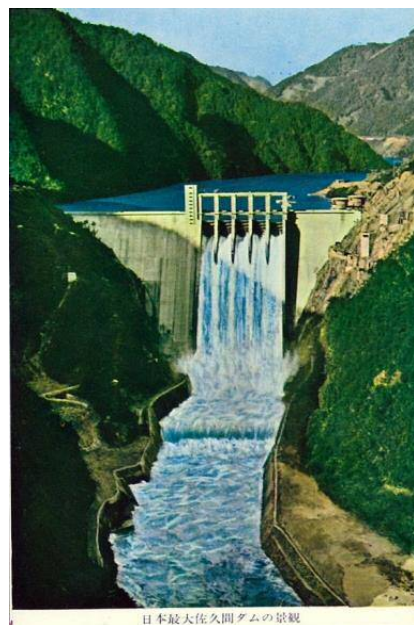


図1-4-39 佐久間ダムの絵葉書

城内でのこども博覧会開催後に動物園を開園、また出丸跡に図書館が開館した。昭和 27 年(1952)には市役所が完成し、市民の寄付を募って昭和 33 年には復興天守閣が建設された。昭和 38 年(1963)の体育館、昭和 46 年(1971)市制 60 周年で美術館など、新たな公共施設が浜松城を中心とした地域に集約された。

さらに、この復興計画では、三の丸跡を貫いて南北、東西の都市計画道路が建設され、旧城内にその交差点が設けられるなど、このころの浜松城内は、有効利用できる広大な土地という認識が見られる。後年になって、体育館、プール、動物園は城外へ移転し、平成 26 年(2014)には、浜松城天守門が再建されるなどかつての城の姿が重要視されている。

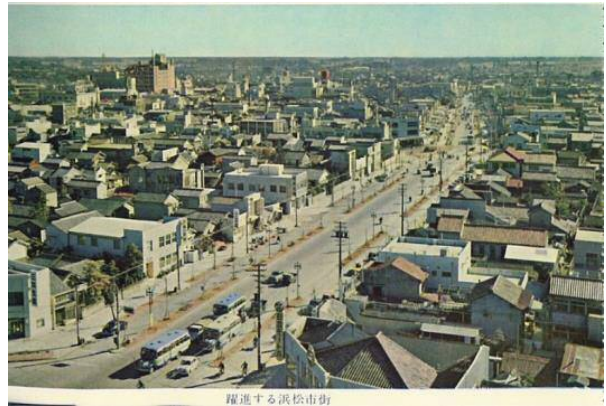


図1-4-40 昭和 30 年代の絵葉書に見る浜松市街地

近年には、二の丸跡にあった小学校も中学校と統合移転した。

②平成から令和へ

ア.平成の大合併

静岡県内では、平成 15 年(2003) 3 月 31 日から平成 22 年(2010) 3 月 31 日までのあいだに市町村合併が行われ、74 の市町村が 35 の市町に集約された。

平成 17 年(2005) 7 月 1 日、浜松市、^{はまきた}浜北市、^{てんりゅう}天竜市、^{まいさか}舞阪町、^{ゆうとう}雄踏町、^{ほそえ}細江町、^{いなさ}引佐町、^{みつかび}三ヶ日町、^{はるの}春野町、^{さくま}佐久間町、^{みさくぼ}水窪町及び^{たつやま}龍山村の 12 市町村が合併し、面積 1,558.06 平方キロメートル、人口 808,132 人、世帯数 330,909 世帯の新しい浜松市が誕生した。

イ.中核市そして政令指定都市への移行

平成 8 年(1996) 4 月 1 日、人口 547,875 人を擁する旧浜松市は、中核市へ移行した。

また、大合併後の平成 19 年(2007) 4 月 1 日には、人口 796,114 人を擁する浜松市は、県並みの権限と大きな財源で、市民が望む市政を強く推し進めることができる政令指定都市に移行し、中区、東区、西区、南区、北区、浜北区、天竜区の 7 つの行政区が成立した(各区の範囲については、図 1-1-8 を参照)。人口比では旧中区が突出して約 30%と多く、天竜区は市の面積の約 60%を占めるが、人口は 3%強にとどまっている(図 1-4-41)。

平成 23 年(2011)には、市制 100 周年を迎え、令和 6 年(2024) 1 月 1 日に中央区、浜名区、天竜区の 3 つの行政区に編成した。



図1-4-41 区の人口比率
令和 3 年 3 月 1 日時点

ウ.現代にいたる社会変化と課題

明治政府の殖産興業政策から、浜松市内の景観は変貌を始める。^{け た が わ} 気田川流域の森林を利用した国内最初のパルプ工場が完成したのをはじめ、鉄道院(旧国鉄、現JR東海)の工場の誘致などが積極的に行われた。民間でも織布工場や染色が発展し、例えば^{ま ご め が わ} 馬込川沿い(旧天竜川)の元の河川敷など、当時の都市郊外に規模の大きな工場が立地した。日清紡や近藤紡の大規模な工場は、高度成長期まで全国から従業員を集めるなど浜松の産業をけん引していたが、工場撤収後には郊外型の大型店舗となっている。

^{み か た は ら} 三方原台地は、近代の耕地開発が結果的に成功せず、第67連隊の創設以降、大半が軍用施設として接収された。敗戦後に開拓と用水の通水が始まってようやく農地がひろがった。

オルガンの修理から始まった楽器製造、原動機付自転車から始まる自動車製造も市域で裾野の広い工場群を展開しており、現在でも関連企業は多い。また楽器では個人工房も点在する。大規模な製造拠点は市外に転出しているが、浜松を楽器、また音楽のまちとして認識している人は多く、プロムナード・コンサートなど、継続しているイベントも数多くある。

「楽器のまち」から「音楽のまち」、さらに「創造都市」へとビジョンを替える浜松市は、そのビジョンにハードからソフトへという文化政策の転換を内包している。

近代には、廃仏毀釈、戦争による金属製品の供出さらに戦災による焼失と、市内の文化財を大きく失う機会を経験した。現在においては、旧態のコミュニティが衰退し、市内の豊富な文化財の継承にも警鐘が鳴らされる時代となってきた。

エ.浜松市の多様な歴史的風致の抽出にあたって

前述のように、平成17年(2005)に12市町村が合併した浜松市は、面積1,558.06平方キロメートルとなり、全国的にも岐阜県高山市に次いで広大な市域を有することになった。

この面積は、規模の小さな都道府県の面積にほぼ匹敵する。(高山市は実際に下位の府県よりも広い。)浜松市の面積は、静岡県内で比較すると伊豆半島全体と同程度になる。また、東京都はその面積に島嶼部を含んでおり、伊豆諸島などの面積を除いた本州島に占める面積は約1,477平方キロメートルとなる。したがって、本州部で比較するなら、浜松市は東京都よりも大きな行政区画となっている。

先述したように、浜松市は古代における7郡を含むほど広大で、地形や気象はもとより、人びとの営みにも地域ごとの特色がある。以降の章では、地域の特性をさまざまな視点から抽出し、市域から複数の歴史的風致を導き出すこととする。

表1-4-6 面積の大きな市と都府県

順位	都府県名/市名	面積(km ²)
44	沖縄県	2,282.52
45	東京都	2,194.05
1	高山市(岐阜県)	2,177.61
46	大阪府	1,905.34
47	香川県	1,876.92
2	浜松市(静岡県)	1,558.06
3	日光市(栃木県)	1,499.83
4	北見市(北海道)	1,427.41
5	静岡市(静岡県)	1,411.83

出典

『令和3年 全国都道府県市区町村別面積調』
国土地理院 令和3年9月

注釈

近代以前の地名表記は古文書などのなかで安定していない。ここでは、以下の仮基準で本書文中における表記の統一を試みる。

■^{みかたはら}三方原台地と^{みかたがはら}三方ヶ原、三方原町

三方原のほか、味方原、箕形原などの表記が見られる。ここでは現行の地名にあわせて「三方」を使用する。地理学でいう三方原台地は、天竜川右岸、浜名湖の東側の洪積台地全体を指す。近世までの三方ヶ原は、和地山、都田山、祝田山などを除いた、本坂通以北の原野を指す。また、行政区画である三方原町はそのごく一部である。そこで、歴史上の2度の合戦で著名な場所を「三方ヶ原」（「ヶ」の文字を加える）と表記して区別する。それぞれの範囲は、三方原台地>三方ヶ原(古戦場)>(三方原地区)>三方原町 となる。

■^{ひくま}引間

鎌倉時代から戦国時代までの地名。また浜松城の別名。古文書では、引間、引馬、疋馬、引駒、曳駒などの表記があって安定しない。読みも現行の「ヒクマ」ではなく、「ヒキマ」（あるいは「ヒコマ」）だった可能性がある。中世東海道の宿場であり、多くの文字表現から「馬をひく」が本来の意味かと推定される。「馬をひく」は「引出物」に通じ祝賀にあたる地名だったはずだが、戦国時代の武将たちにとっては、合戦の際の「敗走」に通じるともとらえられたことから、「馬」ではなく「間」の字を多く使うようになったという説がある。旧浜松市歌を作詞した森鷗外もそう類推した一人である。

別に、現在の浜松市中央区には、「曳馬町、曳馬一丁目～六丁目」が所在するが、中世の引間宿、引間城下町推定地とは場所が異なっている。ここは、江戸時代まで「島之郷村」であったことが明らかで、浜松市合併前に「曳馬下村」を称したことから合併後にその名を継承し、地区名も「曳馬地区」としたものである。

なお、『万葉集』には、大宝2年(702)、持統太上天皇が三河(現愛知県東部)に行幸した時の歌として「引馬野に匂ふ榛原入り乱り衣にほはせ旅のしるしに」が取り上げられている。この「引馬野」(本編は万葉仮名で表記されており、この漢字は後世にあてたもの)の故地を行幸先の三河ではなく、積極的に遠江にあたる浜松市内ととらえる学説が江戸時代から提唱されている。以降、三方原台地を「曳馬野」と表現することがある。『曳駒拾遺』、『遠江国風土記伝』では浜松城下の「引駒坂(引馬坂)」について2例を掲載する。天林寺前から犀ヶ崖方面に西進する上り坂と、大手門前(連尺町)から高町に向かう上り坂である。前者は中世引間宿からの道筋、後者は近世の浜松城下町からの道筋と考えられ、時代とともに前者から後者に推移したものと思われる。

ここでは、中世の浜松荘の宿場と城跡を、現行地名など他と区別する意味で「引間」と表記する。

■^{しろわ}白羽

南北朝時代、遠江で南朝方の支援を得ようとした宗良親王が、遠江の「白羽」に上陸して井伊家の本拠に向かったという。この白羽は遠州灘に面した場所であることは間違いないが、現浜松市中央区白羽町付近、あるいは磐田市白羽、御前崎市白羽とする諸説がある。さかのぼって『万葉集』に採録された天平勝宝7年(755)に遠江国山名郡から筑紫へ防人として向かう丈部真磨の歌「遠江白羽の磯と贅の浦とあひてしあらば言も通はむ」も白羽の場所について同様である。ここでは、それらの評価は保留する。

浜松市の白羽付近は、^{まごめがわ}馬込川河口(当時は天竜川本流)近くの内湾で「白羽湊」とも呼ばれており、「大入」という地名を残す。また引間から井伊谷へ向かう旧道(江戸時代の浜松宿からの本坂道)沿いの三社神社(現中央区鹿谷町)には、宗良親王に食事を提供したという伝承がある。